

令和6年度

# 名古屋短期大学 自己点検・評価報告書

令和6年9月

名古屋短期大学 大学評価委員会

## 目 次

1. 自己点検・評価の基礎資料	1
2. 自己点検・評価の組織と活動	10
3. 学科・委員会等の自己点検・評価報告	14
保育科・保育専攻	15
英語コミュニケーション学科・英語専攻	23
現代教養学科	29
教務委員会	34
学生委員会	38
入試委員会	42
図書館運営委員会	47
大学評価委員会	50
将来計画検討委員会	51
IR推進委員会	53
教育・保育職支援センター	55
チャイルド・エデュケア研究所	59
4. 基礎データ	62

## 1. 自己点検・評価の基礎資料

## 1. 自己点検・評価の基礎資料

### (1) 学校法人及び短期大学の沿革

#### <学校法人の沿革>

学校法人桜花学園は、明治36（1903）年、大溪 専（おおたに もはら）によって創立された桜花義会看病婦学校を母体とした学園である。「信念のある女性の育成」が大溪専の教育理念であった。以下に本学園の沿革の概要を記す。

明治36年	名古屋市中区に桜花義会看病婦学校を創立（創立者：大溪専）
大正12年	名古屋市昭和区に桜花高等女学校を創立（創立者：大溪専）
昭和14年	名古屋商業実践女学校を創立
昭和18年	名古屋商業実践女学校を桜花女子商業学校に昇格、昭和20年廃止
昭和23年	桜花女子学園中学校と桜花女子学園高等学校を設置、中学校は昭和30年に廃止
昭和30年	名古屋短期大学（保育科）を名古屋市昭和区に設置
昭和42年	昭和42年に愛知県豊明市栄町に移転 桜花女子学園高等学校を名古屋短期大学附属高等学校に校名変更 名古屋短期大学附属幼稚園を名古屋短期大学と同地に設置
昭和51年	名古屋短期大学に英語科を設置、平成10年に英語コミュニケーション学科に名称変更
昭和57年	名古屋短期大学に教養科を設置、平成10年に現代教養学科に名称変更
平成2年	豊田市に豊田短期大学を設置
平成3年	名古屋短期大学に専攻科（保育専攻1年課程）を設置、平成8年に保育専攻2年課程に改編
平成6年	名古屋短期大学専攻科（保育専攻）は、学位授与機構に認定
平成10年	豊田短期大学を桜花学園大学に改組 人文学部（豊田市）を設置
平成11年	名古屋短期大学附属高等学校を桜花学園高等学校に校名変更
平成14年	桜花学園大学保育学部保育学科設置、桜花学園大学大学院修士課程人間文化研究科設置
平成15年	保育子育て研究所を設置
平成19年	名古屋短期大学専攻科（英語専攻）2年課程設置
平成20年	名古屋短期大学専攻科（英語専攻）は、学位授与機構に認定
令和6年	名古屋短期大学附属幼稚園を名古屋短期大学桜花学園大学附属幼稚園に名称変更

#### <短期大学の沿革>

創立者大溪専の遺志を継いだ大溪賛雄はその教育理念を徹底させるために中学校、高等学校のほかにも大学を持たなければならないと、昭和30（1955）年に名古屋短期大学を名古屋市昭和区緑町1-7にある現在の桜花学園高等学校の一角をキャンパスとして保育科（入学定員30人）単科の短期大学として設立した。昭和42（1967）年に現在の豊明市のキャンパスに移転した。昭和51（1976）年には英語科（入学定員100人）が設置され、平成10（1998）年に英語コミュニケーション学科と名称を変更して今日に至っている。また、昭

和57（1982）年に教養科（入学定員150人）が設置され、平成10年（1998）に現在の現代教養学科に名称変更している。平成3（1991）年に専攻科（保育専攻）1年課程を設置し、平成6（1994）年に学位授与機構の認定を受け、平成8（1996）年に2年課程に改編した。平成19年（2007）には専攻科英語専攻（2年課程）を設置し、平成20（2008）年に学位授与機構認定専攻科となった。

昭和30年	名古屋短期大学（保育科）を名古屋市昭和区に設置
昭和42年	愛知県豊明市栄町に移転
昭和51年	名古屋短期大学に英語科を設置
昭和57年	名古屋短期大学に教養科を設置
平成3年	名古屋短期大学に専攻科（保育専攻1年課程）を設置
平成6年	名古屋短期大学専攻科（保育専攻）が学位授与機構に認定
平成8年	専攻科（保育専攻1年課程）を保育専攻2年課程に改編
平成10年	英語科を英語コミュニケーション学科に、教養科を現代教養学科に名称変更
平成15年	保育子育て研究所を設置
平成19年	名古屋短期大学専攻科（英語専攻）2年課程設置
平成20年	名古屋短期大学専攻科（英語専攻）が学位授与機構に認定
平成30年	保育子育て研究所をチャイルドエデュケア研究所に改編

## (2) 学校法人の概要

■学校法人が設置する全ての教育機関の名称、所在地、入学定員、収容定員及び在籍者数

■令和6（2024）年5月1日現在

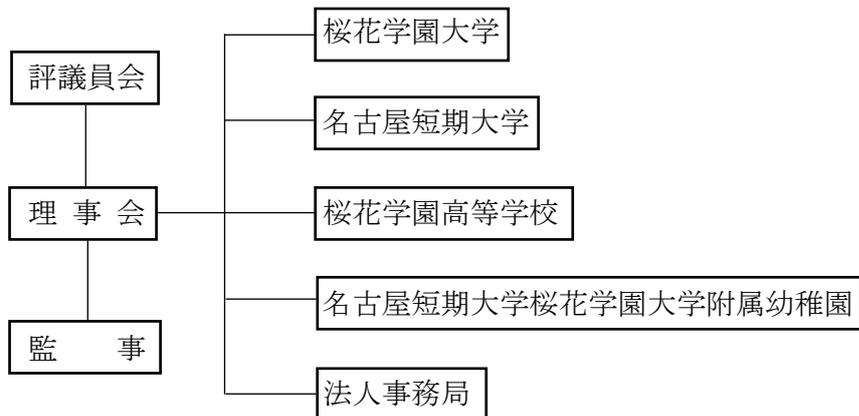
教育機関名	所在地	入学定員	収容定員	在籍者数
桜花学園大学	愛知県豊明市栄町武侍 48	225	920	713
桜花学園大学大学院	愛知県豊明市栄町武侍 48	10	20	14
名古屋短期大学	愛知県豊明市栄町武侍 48	300	700	450
名古屋短期大学専攻科	愛知県豊明市栄町武侍 48	27	54	69
桜花学園高等学校	愛知県名古屋市昭和区緑町 1-7	500	1,500	859
名古屋短期大学桜花学園大学附属幼稚園	愛知県豊明市栄町武侍 48	105	314	224

### (3) 学校法人・短期大学の組織図

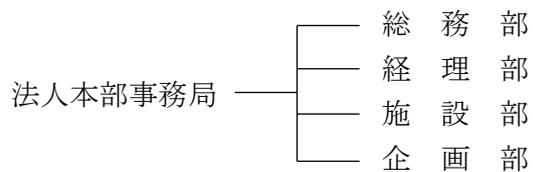
■組織図

■令和6（2024）年5月1日現在

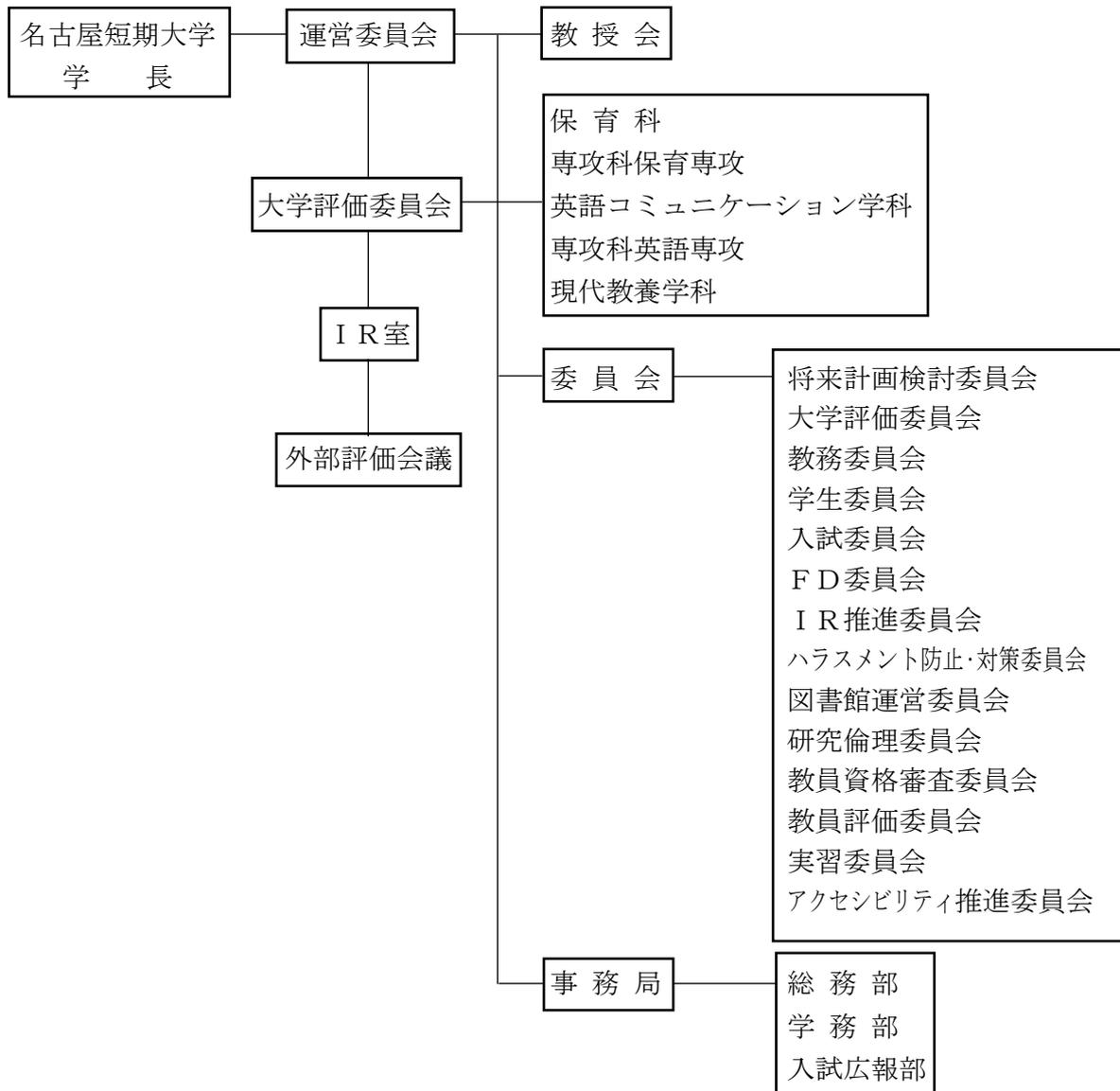
#### 学校法人桜花学園 組織図



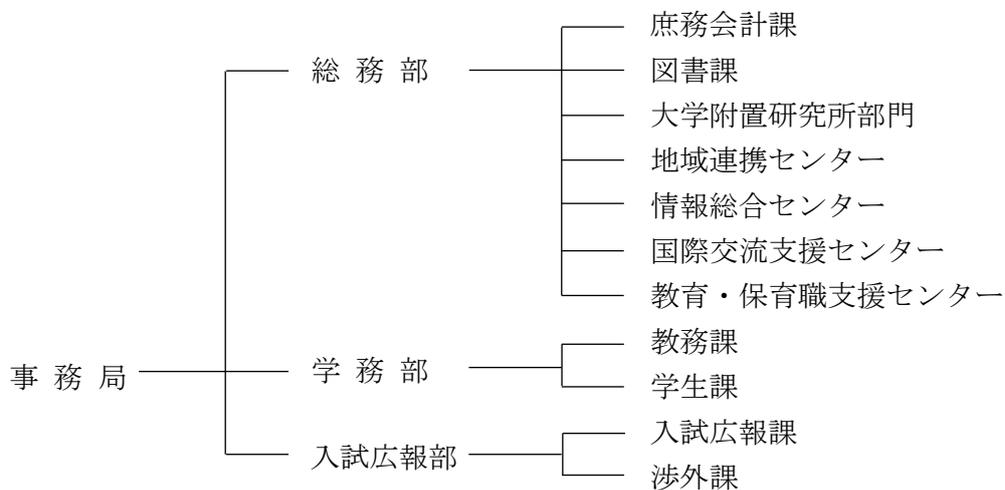
#### 法人 事務組織



名古屋短期大学 組織図



名古屋短期大学 事務組織



#### (4) 立地地域の人口動態・学生の入学動向・地域社会のニーズ

##### ■立地地域の人口動態（短期大学の立地する周辺地域の趨勢）

本学は愛知県西部の豊明市に立地しており、名古屋市緑区に隣接している。豊明市は人口6万9千人余で、名古屋市のベッドタウンとして発展している。隣接する政令指定都市である名古屋市は人口230万人余、大府市は9万人余、刈谷市は15万人余、豊田市は42万人余で、大規模な人口を擁した周辺市に囲まれている。愛知県の人口は長年増加してきたが、令和元年の755万人余を境にここ数年は減少傾向に転じている。

##### ■学生の入学動向：学生の出身地別人数及び割合（下表）

地域	令和元 (2019) 年度		令和2 (2020) 年度		令和3 (2021) 年度		令和4 (2022) 年度		令和5 (2023) 年度	
	人数 (人)	割合 (%)								
北海道	1	0.3%					1	0.4%		
山形県										
福島県			1	0.2%						
茨城県										
栃木県							1	0.4%		
千葉県			1	0.2%						
東京都			1	0.2%						
富山県	1	0.3%	1	0.2%	1	0.3%	1	0.4%		
石川県	1	0.3%			1	0.3%	1	0.4%		
福井県	1	0.3%			1	0.3%	1	0.4%		
山梨県										
長野県	5	1.3%	4	0.9%	2	0.5%	2	0.8%	1	0.5%
岐阜県	9	2.3%	20	4.7%	19	4.5%	13	5.1%	12	5.4%
静岡県	9	2.3%	5	1.2%	1	0.3%	3	1.2%	2	0.9%
愛知県	334	84.6%	362	84.4%	321	84.0%	206	80.2%	180	81.1%
三重県	28	7.1%	29	6.8%	30	7.9%	21	8.2%	24	10.8%
滋賀県										
大阪府					1	0.3%				
兵庫県			1	0.2%			1	0.4%		
奈良県	1	0.3%	1	0.2%			1	0.4%		
和歌山県			1	0.2%	1	0.3%				
鳥取県							1	0.4%		
島根県	1	0.3%								
岡山県	1	0.3%								
広島県	1	0.3%							1	0.5%
徳島県										
香川県										
愛媛県					1	0.3%				
福岡県	1	0.3%								
長崎県							1	0.4%		
宮崎県			1	0.2%						
鹿児島県			1	0.2%			2	0.8%		
沖縄県					1	0.3%				
その他	1	0.3%			2	0.5%	1	0.4%	2	0.9%
総計	394	100.0%	429	100.0%	382	100.0%	257	100.0%	222	100.0%

##### ■地域社会のニーズ

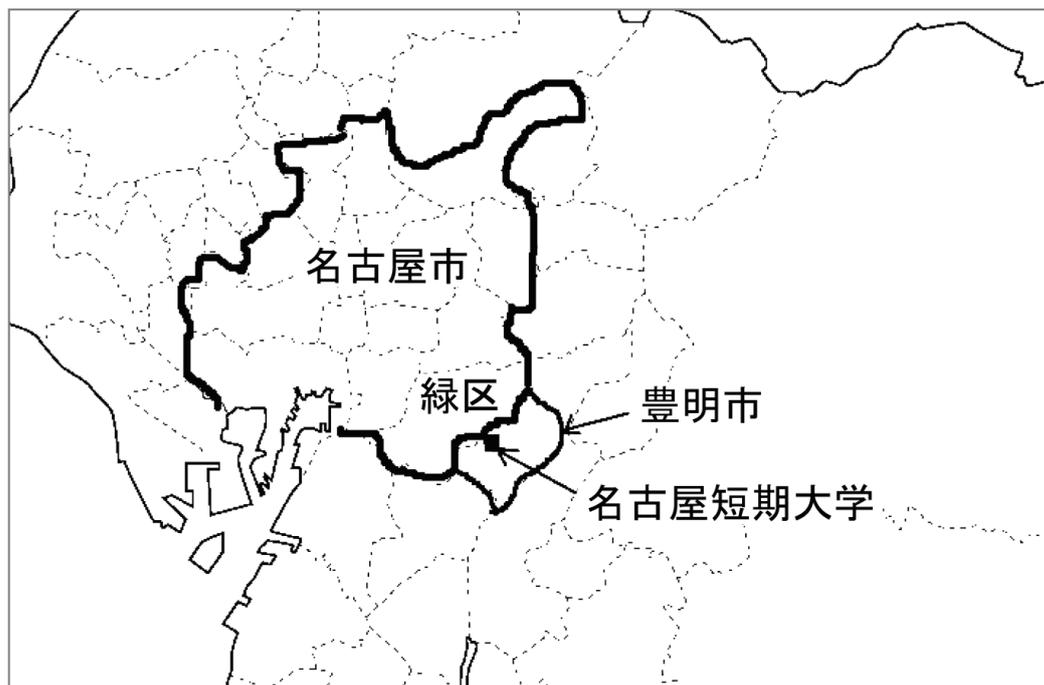
本学入学者は、愛知県西部を中心に、岐阜県・三重県・静岡県・長野県などの中部各県をはじめとして、少数ではあるが関東、関西、またはそれ以遠など県外からの入学者もい

る。豊明市に設置される高等教育機関は、藤田医科大学と本学園が設置する桜花学園大学と本学のみである。本学保育科と桜花学園大学保育学部が共同運営している「チャイルドエデュケア研究所」は、地域の親子を対象とした子育て支援事業を展開している。また、豊明市とは包括連携協定を締結し、教員や学生の派遣などの様々な依頼に積極的に対応している。保育者不足が続いている状況から、愛知県内の保育施設からの求人は、公立・私立に関わらず非常に高まっている。

#### ■地域社会の産業の状況

名古屋市は政令指定都市、中枢中核都市であり、日本最大の工業地帯である中京工業地帯の中枢である。全国的な製造業の本社が集積している重工業都市でもある。また、日本を代表する国際貿易港である名古屋港を有する。豊明市にはアジア最大の鉢物卸売市場である愛知豊明花き地方卸売市場がある。近接の犬伏市、刈谷市、豊田市などは、トヨタ自動車に代表される自動車関連の大企業と、その下請けの中小企業が多数集まっており、日本有数の自動車工業地域である。また、農業も盛んである。

#### ■短期大学所在の市区町村の全体図





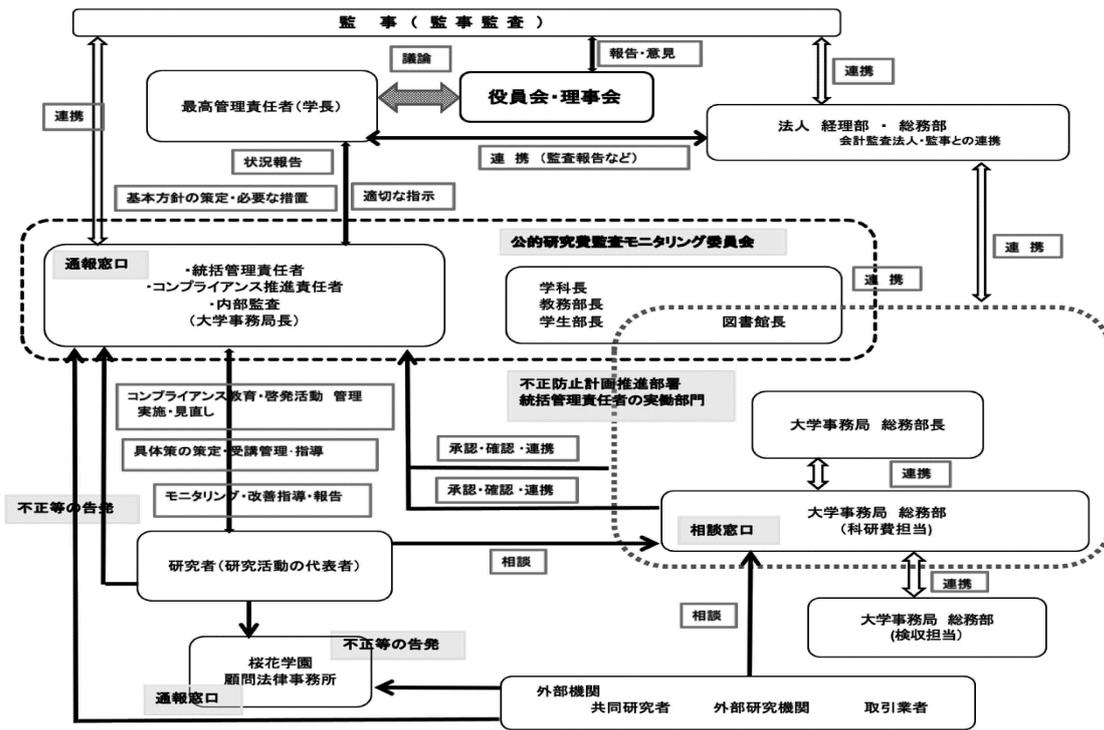
Googleマップより引用

#### (5) 公的資金の適正管理の状況（令和6（2024）年度）

■公的資金の適正管理の方針及び実施状況を記述してください（公的研究費補助金取扱いに関する規程、不正防止などの管理体制など）。

本学では、「学校法人桜花学園公的研究費不正防止に関する管理・監査に関する規程」等に基づき公的資金を管理している。これにより研究費の使用に関するルールを統一しているため、研究者にとっては公的資金の使用に対する戸惑いや間違いが起きにくく、不正使用防止に対する対策としている。行動規範については本学独自で策定しておらず、日本学術会議が公開している「科学者のための行動規範」を適用している。

また不正行為防止のために、本学では日本学術振興会が提供する「研究倫理eラーニング」を年に1度実施している。その他に全教員が参加する学内会議などにおいて不正行為防止の啓発を行っている。



## 2. 自己点検・評価の組織と活動

## 2. 自己点検・評価の組織と活動

### ■自己点検・評価委員会（担当者、構成員）

自己点検・評価活動のための組織として、大学評価委員会を設置している。委員会の構成員は以下の通りである。

#### <令和6年度大学評価委員会の構成（「名古屋短期大学大学評価委員会規程」第3条に準拠）>

学長	大谷 岳
A L O	平野 朋枝
保育科学科長	吉見 昌弘
英語コミュニケーション学科学科長	大西 美穂
現代教養学科学科長	高谷 邦彦
図書館長	太田 昌孝
教務部長	小川 絢子
学生部長	茶谷 淳一
入試委員長	福本 陽介
事務局長	鈴木 一夫

■自己点検・評価の組織図（規程は提出資料）

<令和6年度大学評価委員会の組織〔図1〕>



■組織が機能していることの記述（根拠を基に）

本学の自己点検・評価活動は、全教職員が参加する各部署の日常的な業務の中で行われる。その各部署の全責任者によって本学の大学評価委員会は構成されている（「図1」参照）。本学の令和5（2023）年度の業務全体に対して実施されることを基本とする令和6（2024）年度の自己点検・評価活動の概要については、次項の「自己点検・評価報告書完成までの活動記録」に記録されている。この実際の活動記録と基本的な全業務を反映するように構成された本学の大学評価委員会の構成に基づいて、本学の自己点検・評価のための組織は機能している。

### 3. 学科・委員会等の自己点検・評価報告

学科名・ 委員会名	保育科・保育専攻
<p>(1) 学習成果の評価と改善計画</p> <p>○3ポリシーの適切性の確認</p> <p>建学の精神に基づき各ポリシーは適切に運用されていると考えられる。今後は、男女共学化が進む中で、実態に合わせて修整する可能性もあること。また、カリキュラム等の見直しに伴い、今後、新たに各ポリシーの見直しも検討していく。</p> <p>○教育目標の達成状況</p> <p>資格取得の状況や単位取得状況等のデータ結果から、資格・免許取得の割合が年々低くなる傾向にある。入学時の学習意欲の低下も懸念されることから、多様な学生のレベルに合わせた個別の学習指導など、意欲的に学習に取り組む体制の検討が必要と考えられる。</p> <p>○教育課程の見直し</p> <p>資格・免許の取得率の低下などにみられるように、学生の多様なニーズが要求されつつある。学生の現状に合わせて、新しく教育課程を見直す必要がある。</p> <p>○学習支援策</p> <p>学習意欲が低く、授業を欠席したり、課題の提出が遅れたりしている学生に対して、授業担当者やゼミ担当教員を中心にした支援体制の再検討が必要である。</p> <p><b>評価に用いた指標（資料名）</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■卒業・休退学等のデータ</li> <li>■単位取得関係のデータ・GPA</li> <li>■就職・進学関係のデータ</li> <li>■免許・資格取得のデータ</li> <li>■授業評価アンケート</li> <li>■満足度調査結果</li> <li>■選抜試験結果</li> </ul>	

## (2) 今年度の活動内容の評価と改善計画

### 1 教育・学生支援について

本学の「教育に親切なれ」の教育方針に沿って、実習担当者による丁寧な実習事前事後指導やゼミ教員による個別の教育支援、進路指導等、きめ細かいサポートを実施してきた。GPA の低い学生が増えるなど、学力の低下と学習意欲の低下した学生が増加していることから、改善計画としては、一部の教員に負担が偏らないように会議時などにおいて、各授業を通して履修指導の必要な学生の報告を密接に行い、教員間の連携を重視していく。

### 2 学生募集について

全国的に短期大学の志望者と保育を目指す受験生が減少し、本学保育科も従来の学生募集だけでは不十分と考えられる。そのため、保育科独自の企画として、今年度は、ナイトキャンパスツアーや土曜体験授業などを実施してきた。改善計画としては、2024 年度は新たに名古屋短期大学保育科オフィシャルサポーターを発足し、学生主体とした広報活動を展開すること。SNS の中でも最近特に高校生に人気の高い Instagram や TikTok などを利用して積極的に広報に活用することを実施する。さらに、保育科への志願者が多い高校等へ教員が訪問したり、高大連携を推進していくことで定員確保を目指す。

### 3 その他

2023 年度は現状に合わせて保育科の定員を 240 名から 200 名に削減する一方、専攻科保育専攻の定員を 20 名から 40 名に増やした。今後は、現状に合わせて定員を検討すると同時に、他大学と異なる差別化を目指した改革を推進していく。

### (3) 年度末点検結果

保育科の令和5年度以降の行動計画（事業計画）の実施状況点検・評価は下記の通りである。

#### 1 教育・学生支援について

公務員の正規採用者は例年通り、高い割合を示しているが、母集団の学生数が減少しているため、採用者数は減少の傾向にある。一人一人への丁寧な就職指導は実施してきたが、保育者を目指さない学生等、多様な進路の学生への支援も必要な課題となりつつある。専攻科進学率は一定数を確保しているが、学習レベルと意欲の差が大きいことが課題となっている。

#### 2 学生募集について

学生募集は、短大、保育科離れに十分に対応できず、定員の確保が困難な状況が継続している。専攻科を前面に出して4年制志望者層を取り込むこと。新たな名短保育のブランドとなる新しい取り組みや改革が急務となっている。

#### 3 その他

学生の学力及び意欲の低下に対しては、十分に対応できていない。一つの試みとして、入学前の教育指導を試みていきたい。また、多様な進路に対しては、福祉系の施設への就職先の確保など検討していきたい。

#### (4) 次年度以降の行動計画（＝次年度末点検項目／次年度事業計画）

##### 1 教育・学生支援について

###### ●重点項目

- (1) 就職する学生との相性を考慮した就職先へ学生を送れるよう、情報の収集と学生一人ひとりに対して適切な就職指導を行う。
- (2) 学生の質が多様化する中、保育職への意欲を向上させつつ、より質の高い保育者の養成に取り組む。
- (3) 短大2年＋専攻科2年＝4年一貫教育による四大志望層を取り込む。  
四大での保育の学びと差別化を図るために、短大入学時より専攻科進学を見据えて指導し、学生の進学意識の強化を図る。
- (4) 学習成果の指標を省察し、課題の解決と改善を図る。  
学習成果の指標を省察し、単に検討するだけでなく、新たな計画を立案し、実施することでPDCAサイクルを展開する。

###### ●新規項目

- (1) 保育科の新しいカリキュラムの再編、新たな資格・免許の創設を検討し、一部を実施する。
- (2) 保育基礎演習、保育実践演習、保育・教職実践演習の授業（ゼミ）の方法及び内容等の見直しを検討し、実施する。
- (3) 韓国、オーストラリア等の海外研修を見直し、改善する。
- (4) 特別支援に関する学内認定資格（インクルーシブ保育専門員）を発行する。

###### ●継続項目

- (1) 進路就職指導の徹底
  - ・専任教員の専門分野を活かした就職対策講座の実施
  - ・就職を希望する地域と時期に対応したきめ細かな指導
  - ・専攻科進学希望者の進学意欲の強化、進学希望者への早期教育の取り組み
- (2) 国際的な視野を持った保育者の育成
  - ・オーストラリア、韓国の海外研修
  - ・ヨーロッパ幼児教育研修(桜花学園大学保育学部と共同実施)
  - ・国内における外国籍児童の保育・子育て支援を検討

##### 2 学生募集について

###### ●重点項目

- (1) 保育離れ、短大離れに対する学生募集対応策の検討
  - ・【名短保育】ブランドの維持と特色のある学科を目指して改革を推進
  - ・四大・専門学校と差別化(短期大学2年＋専攻科2年での学びのメリット発信)
- (2) ホームページ等のリニューアル及びSNS、YouTube等の積極的な活用
- (3) 特色あるOCの企画と保育科の独自企画の実施

###### ●新規項目

- (1) 入試広報課と連携した広報活動エリア・内容の見直し

- (2) 他大学（桜花学園大学含む）との差別化に対応した新たな付加価値の検討
- (3) 学生主体の広報活動を展開する保育科オフィシャルサポーターの創設

●継続項目

- (1) 高大連携の積極的取り組み
- (2) 各種入試別の募集人数の調整と選抜方法の見直し
- (3) 高校での学科説明および模擬授業への積極的参加
- (4) 愛知県近隣と、過去に実績のある高校に対する広報

### 3 その他

●重点項目

- (1) 短期大学の学びと専攻科との継続性・連動性
- (2) 学生の学力および意欲の低下に伴う基礎学力強化に向けた取り組み
- (3) 保育職以外に一般職など多様な進路選択を可能にする指導体制の検討

●継続項目

- (1) 民間保育園・幼稚園への就職活動への助言指導（学生にあった就職先の提案）
- (2) 子ども芸術祭など地域貢献を目指した保育科の行事の実施

## § 専攻科保育専攻

### 1 教育・学生支援について

●重点項目

- (1) 高度な専門性を備えた保育者養成
  - ・各自のテーマに合った論文の個別指導
  - ・学生が自分で考え、行動する授業展開
- (2) 有資格者として、高度な目的意識が持てるような指導体制
- (3) ワーキングスタディの受け入れ先の調整と改善

●新規項目

- (1) 新しいカリキュラムと資格・免許を取得することを検討
- (2) 留学タイプの募集を停止し、桜花学園大学への編入及び短期留学等を検討
- (3) 実習において学生の質や実習の目的を踏まえた指導体制の構築
- (4) 海外にルーツを持つ子ども達の保育に関する「国内」での学び

●継続課題

- (1) 論文指導における講座制、副査のあり方について
- (2) 専攻科入試の入試方法と時期の見直し
- (3) 長期実習と論文指導体制について
- (4) ワーキングスタディの拡大

## 2 学生募集について

### ●重点項目

- (1) 本学専攻科の学びを広報し、希望者の積極的な受け入れ
- (2) 「専攻科指定校制度」をさらに定着させ、他短大からの入学ルートの確立
- (3) 四大との学びの差についての更なるアピール

### ●新規項目

- (1) 保育科卒の学生のみでなく、他の短大、社会人等を取り組むための広報戦略の検討
- (2) 専攻科の新たなホームページ、広報用チラシ等の作成

### ●継続項目

- (1) 専攻科入学、入試説明会の更なる充実
- (2) 社会人や他短大生の積極的受け入れ

## 桜花学園 中期計画

(2024年度～2028年度)

### 名古屋短期大学

#### 保育科・保育専攻

##### 1. 学生・生徒・園児募集における広報強化策

[5年間の数値目標]

	2024年	2025年	2026年	2027年	2028年
入学者 目標値 (人)	200	200	200	200	200
入学定員 (人)	200	200	200	200	200

※目標値は、それぞれの該当年度4月の入学者数

[対応策]

##### (1) 保育者離れ、短大離れに対する学生募集対応策の検討

志望校選びの早期化に対応し、年内の指定校推薦や推薦入試において可能な限り定員を確保していく。入試広報として、各OCで特徴ある企画を実施し、SNS（特にInstagramやTikTok）や学科ニュース、高校訪問などを積極的に取り入れる。また、ナイトキャンパスツアーなど保育科独自の企画の他、新たにオフィシャルサポーターを創設し、学生主体の広報活動を試みる。

##### (2) 【名短保育】ブランドの維持と新たな学科の再編の検討

保育離れが著しい中、「保育は名短」と呼ばれるように、愛知県下に優秀な保育者を輩出してきた歴史と誇りを今一度アピールできるように、新たな魅力を発信する。そのためには、他大学との差別化を意識し、「多様性」と「国際性」、「地域貢献」を特色とした新たな魅力を創出する。

##### 2. 教育・研究活動における新たな魅力の創出

(1) 高校生に魅力のある新しいカリキュラムを検討し、さらに多様な学生のニーズに合わせた履修モデルの導入、また新たな資格・免許の取得が可能か検討し、実施する。男女共学化に伴い、男子学生にも魅力のある教育・進路を検討する。

(2) 附属幼稚園との教育・研究面での連携を深め、保育の実践力の育成の方策を検討し、実施する。

(3) 保育の専門性向上をめざして、特別支援に関する学内認定資格（インクルーシブ保育専門員）を発行する。また、国際性の特色として各種の海外研修を継続していく。

3. 満足度の向上（就職支援、進路支援、学生生活等）
  - (1) 公務員試験における小論文、面接、集団討論の指導をさらに徹底する。また、学生の利便性を高めるためにオンラインによる就職対策を推進する。各自治体の試験日や試験科目の変更棟の情報収集を徹底し、学生への発信を速やかに行う。
  - (2) 学生の質が多様化する中、悩みを抱えて入学する学生のフォローや学習意欲の低い学生への対応をゼミ担当教員のみでなく、学科全体で支援する体制を整える。また、学習意欲の高い学生は、さらに自分のスキルを磨くことができるような多様な指導体制を整える。
4. 社会からの要請への対応（地域連携、グローバル化等）
  - (1) 保育者不足解消に貢献し、学生が地元で長く働くことができるよう、多くの自治体と、実習の意見交換会等を定期的で開催し、関係を構築、連携していく。
  - (2) 保育科独自の地域連携を積極的に進めるために、子ども夏まつりや子ども芸術祭など地域の子供達と関わるができる催しを実施する。また、企業や自治体、高校との連携も推進する。
  - (3) 豊明市・豊田市・安城市との地域連携協定を活かして、地域の根ざした大学として教育・保育分野で貢献していく。

### 専攻科保育専攻

#### 1. 学生・生徒・園児募集における広報強化策

[5年間の数値目標]

	2024年	2025年	2026年	2027年	2028年
入学者 目標値 (人)	40	40	40	40	40
入学定員 (人)	40	40	40	40	40

※目標値は、それぞれの該当年度4月の入学者数

[対応策]

- (1) 四大・専門学校との差別化(短期大学2年+専攻科2年での学びのメリット発信)
 

短期大学の2年間で幼稚園教諭二種免許・保育士資格を取得していることを強調し、専攻科では保育者として働きながら学ぶことが可能なことを広報する。また、現役高校生のみならず、リカレント教育として、多様な学び方を推進する。
  - (2) ワーキングスタディ制度についてアピールする。
 

地域連携協定を締結している豊明市・豊田市・安城市以外の公立、私立の幼稚園・保育所、発達センター、様々な児童施設等でワーキングスタディできることを広報し、働きながら幼稚園教諭一種免許に更新できることを発信する。
  - (3) 留学タイプを停止し、その代用として桜花学園大学への編入を実施する。さらに、新たな魅力として短期の留学プログラムを検討する。
2. 教育・研究活動における新たな魅力の創出
    - (1) 保育科のカリキュラムからの学びの連続性を考慮したカリキュラムを編成し、さらに、学生の多様なニーズに合わせた魅力あるカリキュラムを検討する。
    - (2) 社会人・他短大からの入学を積極的に受け入れることができるよう、多様な学び方や魅力ある授業の展開を考える。
    - (3) 研究論文作成の基礎を確実に修得できるように、講座制・副査のあり方を再検討する。また、教員の専門性、多様性を活かして、学生の多様な学びにつなげていく。

#### 3. 満足度の向上（就職支援、進路支援、学生生活等）

- (1) ワーキングスタディなど多様な学び方や魅力ある授業を展開し、その学びが学生

それぞれの多様な進路・就職につながるようにする。

(2) ワーキングスタディを採用する自治体・実施施設等を拡大し、安定した関係性を構築できるように提携を交わす仕組みを構築する。

(3) 保育の免許・資格を有する専攻科生の特質を生かし、保育科の学生と交流の機会をつくるなどして、相互の学びが深まるようにする。また、さまざまな場所で協働連携できるような活動を展開し、学生が自信と誇りをもって就職できるようにする。

#### 4. 社会からの要請への対応（地域連携、グローバル化等）

(1) 保育者不足解消に貢献できるように、学生が地元で長く働くことができるように、多くの自治体等と、ワーキングタディ等を通して関係を構築して連携していく。

(2) 豊明市・豊田市・安城市との地域連携協定等を活かして、地域の大学として保育・子育て支援の分野で貢献していく。

<b>学科名・ 委員会名</b>	<p style="text-align: center;">英語コミュニケーション学科</p>
<p><b>(1) 学習成果の評価と改善計画</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ アセスメント・ポリシーの指標を用いて、学科会議で今年度の学習成果と三つの方針（3ポリシー）について評価・点検を行った。3ポリシーは、次年度の男女共学開始に向け、現ポリシーの精神を維持しつつ一部表現を変更することとした。また、シラバス作成の際に各科目の担当教員にポリシーの周知を図り、次年度の授業への反映をさらに徹底した。</li> <li>・ 上記の査定項目それぞれについて、達成度が高い学生を表彰する学科奨励賞制度を再整備し学生に達成を促した結果、学生の目標設定や達成に寄与した。</li> <li>・ 評価した学習成果のうち、英語力の向上について TOEIC の結果がスコアにして 700 から 800 点台まで到達した学生、および英検準 1 級まで到達した学生が、過去のデータと比較し増加した。</li> <li>・ 旅行・航空業界、空港業務など英語によるサービス職への内定が増加し、就職支援や英語学習の成果が認められた。これを「教育目標」の点から学科会議で確認・点検し、引き続き目標達成に向けて努力することを確認した。</li> <li>・ 入試選抜方法の今年度からの変更が奏功し入学者数が 10 名程度改善した。</li> </ul> <p><b>評価に用いた指標（資料名）</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>✓卒業・休退学等のデータ</li> <li>✓単位取得関係のデータ・GPA</li> <li>✓就職・進学関係のデータ</li> <li>✓免許・資格取得のデータ</li> <li>✓インターンシップ・留学等のデータ</li> <li>✓ポートフォリオ</li> <li>✓授業評価アンケート</li> <li>✓PROG テスト・社会人基礎力テスト結果（1年）</li> <li>✓選抜試験結果</li> <li>✓学生アンケート結果のデータ(2年)</li> <li>✓TOEIC 受験結果・経年集計のデータ</li> <li>✓VELC テスト受験に見られる学生の英語習熟度の向上データ</li> <li>✓英検受験・合格等のデータ</li> <li>✓海外英語研修での評価（当該科目の GPA、派遣先大学での評価等）</li> <li>✓教育実習、インターンシップでの評価（当該科目の GPA、派遣先の評価等）</li> </ul>	

## (2) 今年度の活動内容の評価と改善計画

### 1 教育・学生支援について

- ・ 学習成果の点検・評価は(1)での記述の通り。
- ・ 過去2年の点検強化体制により授業シラバス記載事項の漏れや誤りは減った。
- ・ アクティブラーニングを取り入れた科目を多数設置できていること、次年度はさらに増加することを確認した。
- ・ コロナ禍で滞っていた海外研修を見直し、海外ボランティア・インターンシップや、海外英語研修のプログラムを整備し説明会を徹底した。従来・新規のプログラムともに参加学生の増加を見た。
- ・ 募集定員変更および男女共学に対応した授業科目など教育課程の見直しを行った。次年度以降も継続的に男女共学に資する教育の形を作っていくことを課題とした。

### 2 学生募集について

- ・ 入学者の確保、定員充足に向けた適切且つ効果的な広報のあり方について点検・議論した。今年度は、コロナ禍で滞っていた海外研修先の調整や新規開拓を行い、広報に反映させた。今後も継続的に学科の特徴となる学修のあり方を検討し、それを広報に活用することを継続課題とした。
- ・ 学科から高校への配送物および訪問回数を増やし、学科の特徴を直接伝えたことで、落ち込んでいたオープンキャンパスの来訪者数がやや上向きとなった。
- ・ 紙媒体・SNSなどの活用方法、オープンキャンパスの見直しなどを行った。SNSは試行錯誤も続いているが、効果的な活用方法を探ることを継続課題とした。

### 3 その他

- ・ 建学の精神の周知について、学生アンケートで一定の周知度を維持している状況を確認した。今後とも周知を進めるために、授業の配布物のフッターに明記していく方針を学科会議で決定した。一方、建学の精神であるところの「信念ある女性になれた」と回答した学生の率が高くなっており、建学の精神が教育を通して実際に伝わっていることが分かった。

### (3) 年度末点検結果と継続課題

- 募集定員変更に伴う授業科目数調整や他学科との共同開講科目設置による効率化、および男女共学に対応した授業科目名の変更など、現状に見合う教育課程への大幅な改善を行った。次年度以降も継続的に男女共学に資する教育の形を作っていくことを課題とした。
- 短大を取り巻く社会状況やニーズについて学科研修会で情報共有を行った。併せて、男女共学への転換を効果的に機能させるべく、次年度以降も段階的に各ポリシーやそれに基づく学生募集、教育課程、学位授与方針を整備する必要があることを確認した。
- 過去2年の点検強化体制により授業シラバス記載事項の漏れや誤りは減り、改善の成果が確認された。

### (4) 次年度以降の行動計画（＝次年度末点検項目／次年度事業計画）

#### 1 教育・学生支援について

##### ●重点項目

- (1) 海外英語実習プログラムの整備
- (2) 英語教育の充実
- (3) 学生への学修、進路・就職支援の強化

##### ●新規項目

- (1) 参加者数に応じた海外研修プログラムの適正化
- (2) 社会情勢の変化やニーズに対応した教育、就職支援、学内外での活動の支援
- (3) 就職、進学、留学など多様な進路選択を支える教育

##### ●継続項目

- (1) 海外研修に参加する学生に対する経済的支援（日本学生支援機構の海外留学支援制（協定派遣）の継続採択）
- (2) 学習成果の測定と点検

## 2 学生募集について

### ●重点項目

- (1) 学生確保の見通しの適切な評価と定員管理
- (2) 短大・英語系学科を取り巻く情勢に対応した効果的な広報

### ●新規項目

- (1) 実用的な英語の需要アピール
- (2) 就職実績、編入学など国内・海外への進学実績を活用した広報の実施

### ●継続項目

- (1) 効果的なオープンキャンパスの実施
- (2) ウェブサイトや SNS による広報のより一層の充実

## § 専攻科英語専攻

### 1 教育・学生支援について

#### ●重点項目

- (1) 教育内容、制度・体制の整備
- (2) 少人数教育によるきめ細かい対応と指導

#### ●新規項目

- (1) キャンパス内の他学部・他学科とのより効果的な連携
- (2) 卒業後の進路選択の支援体制整備

#### ●継続項目

- (1) 短大カリキュラムとの連携と適切な履修指導
- (2) 学習環境のさらなる整備

### 2 学生募集について

#### ●重点項目

- (1) 学生の需要に即した募集
- (2) 専攻科進学希望者の早期の把握

#### ●新規項目

- (2) 学生の需要に即した学修のための全般的見直し

#### ●継続項目

- (1) 短大教育との連携

(2) 進学希望者に対する進路選択支援

## 桜花学園 中長期計画 (2024年度～2028年度)

### 英語コミュニケーション学科

#### 1. 学生・生徒・園児募集における広報強化策

##### [5年間の数値目標]

	2024年	2025年	2026年	2027年	2028年
入学者 目標値	50				
入学定員	50				

##### [対応策]

- (1) 海外での実習プログラムの魅力を効果的に広報に盛り込む。
- (2) 航空・空港・ホテル業務など、国際的なサービス関連業務への就職実績をアピールする。
- (3) 四大編入や卒業後の留学の実績を短大の魅力の一つとして宣伝する。
- (4) 紙媒体、Web、SNSなど情報発信ツールを多角的に活用し、そのコンテンツや運用方法が効果的なものになるよう常に見直し改善する。

#### 2. 教育・研究活動における新たな魅力の創出

- (1) 高校生の学びのニーズや将来設計を踏まえ、海外語学研修などの海外での実習プログラムを需要に即して再整備する。
- (2) 国際化する社会に必要な教養と、実用的な英語習得との相乗的な効果を実現する教育課程を目指し、カリキュラムの見直しを行う。

#### 3. 満足度の向上(就職支援、進路支援、学生生活等)

- (1) 入学後の早い時期から、主体的な進路選択を促す具体的な支援を行う。
- (2) 資格・検定の受験促進による、段階的な達成目標を個々に提供する。
- (3) グローバル社会に貢献するための教養と語学力を養い、自信を育む。
- (4) 学科行事の充実を図り、またサークル、委員会活動への主体的参加を戦略的に支援する。

#### 4. 社会からの要請への対応(地域連携、グローバル化等)

- (1) 国際化する地域社会への貢献につながる地域連携関連の授業科目を充実させる。
- (2) ゼミや関連科目において、フィールドワークやボランティア活動等、地域とのアクティブな関わりの場を設けることで、地域社会への理解を深め、同時に地域貢献を促進する。

<b>学科名・ 委員会名</b>	<p style="text-align: center;">現代教養学科</p>
<p><b>(1) 学習成果の評価と改善計画</b></p> <p>学習成果については年度末に全学生の GPA および修得単位数を学科会議で確認し、支援が必要な学生の指導を実施している。</p> <p>学科の教育目標の1つである社会人基礎力の達成状況を確認するためには、1年次の前期末と後期末に自己評価による社会人基礎力確認テストを行って、学科会議で結果を比較検討し改善計画を立てている。また1年生の入学時と年度末の2回実施する PROG テストの結果に基づいて学生の適性を確認し、ゼミ担当教員が学習支援を行っている。</p> <p>年度末には学科独自で実施している満足度調査の結果を学科研修会で詳細に検討・分析することで、定期的に学科の教育目的・目標を確認し、翌年度以降の改善計画を立てている。</p> <p><b>評価に用いた指標（資料名）</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input checked="" type="checkbox"/>卒業・休退学等のデータ</li> <li><input checked="" type="checkbox"/>単位取得関係のデータ・GPA</li> <li><input checked="" type="checkbox"/>就職・進学関係のデータ</li> <li><input checked="" type="checkbox"/>免許・資格取得のデータ</li> <li><input checked="" type="checkbox"/>インターンシップ・留学等のデータ</li> <li><input checked="" type="checkbox"/>授業評価アンケート</li> <li><input checked="" type="checkbox"/>満足度調査結果</li> <li><input checked="" type="checkbox"/>PROG テスト・社会人基礎力テスト結果</li> </ul>	
<p><b>(2) 今年度の活動内容の評価と改善計画</b></p> <p><b>1 教育・学生支援について</b></p> <p>① 就職支援</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 従来どおり、「キャリアデザイン I」の授業を中心として学生課と協働しながら就職支援を行った。1 月末時点での就職率は約 82%と例年より低い数値であるが、これは学生の母数が約 30 名と減少したため就職未決定者の数が例年と変わらなくても数値が大きく下がってしまうためである。IR 室が年度末に行った 2 年生へのアンケートのうち進路サポートに関して「1 年次のキャリアガイダンス、各種セミナー・対策講座」と「ゼミ教員の指導」が高く評価されており、現在の支援体制に特に問題はないと考えている。</li> </ul> <p>② 教育支援</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 1 年生の「キャリアデザイン I」および「教養演習 I(ゼミ)」では、ノートパソコンを使った学修スタイルが定着した。資料配布やレポート提出のデジタル化とオンライン化により、2年間の学修成果をいつでも参照できるようになった。また Teams を使ったオンラインでの共同作業に習熟することで、企業に就職した場合もリモートワーク等にすぐに適応できるはずである。</li> </ul>	

### ③ 学生生活

- 今年度は学外(有松地域)でのフィールドワークや、韓国での海外研修、南信州での宿泊を伴うセミナー、大学祭での飲食系の模擬店運営など多彩な学科イベントが実施され、学外の人との交流(コミュニケーション)の機会も増え、学生の満足度が大いに高まった。ただしサークル・委員会活動への参加者が低迷しているため、今後は委員会活動(特に大学祭実行委員会)への参加を学科として強化していく予定である。

## 2 学生募集について

### ① 新カリキュラム

- 今年度からスタートした新カリキュラムに対する受講生の評価は高く、特に韓国フィールドの科目群に対するオープンキャンパス参加者の関心も高かった。「さくら選抜」「指定校選抜」の受験生の多くが志望理由として「韓国フィールド」の魅力を挙げていた。今後は韓国フィールドだけでなく、社会的に注目が高まっている生成系 AI を取り扱う授業を増やしてカリキュラムの魅力を高めていきたい。

### ② 韓国研修

- 前年度に引き続き今年度も2週間の「韓国研修」を実施することができた。1・2年生合わせて13名が参加し、大きなトラブルもなく充実した研修を終えることができた。今後は韓国研修の参加者の中から韓国の大学へ編入する学生が出るような流れを作っていきたい。

### ③ 学び直し/リスキリングの場の提供

- 教養科目群やコンピュータ関連科目など社会人にとって「学び直し/リスキリング」の機会となる科目群が多いことから、既卒者・社会人に向けて広報を行い、多様な入学者を受け入れたい。今年度はその成果として久しぶりに社会人選抜の入学者が出ていることから、聴講生の制度も併せてさらに広報に力を入れたい。

### (3) 年度末点検結果と継続課題

- 新カリキュラムの広報を強化し、学生の満足度の確認も行う  
高校訪問やオープンキャンパスの配布資料で広報し、受験生の志望理由にも新カリキュラムの内容が挙がるようになった。学生の授業満足度も高く、改善が必要な問題点がないことが確認できた。
- 学外研修や学科イベントなどによる〈体験による学び〉を再始動させる  
行動制限の緩和を受けて宿泊型のセミナーを再開するなど、体験型の学びを強化した結果、学生の評価は高いものとなった。次年度からは教員数の減少によりいくつかの学科イベントを廃止せざるをえないため、満足度を維持することができるかどうかは課題となる。
- サークル・委員会活動への参加を促す  
コロナ禍以降、委員会活動への参加者が低迷しているため、委員会メンバーによる勧誘だけではなく、活動意義をよく知っている教員が面談等を通じてより積極的に働きかけていく必要がある。
- 韓国の大学との交流の機会を増やし、編入実績をあげる  
韓国研修を無事に実施することができ、学生たちの満足度も高かった。参加した1年生の中から韓国の大学への編入を真剣に検討している学生が出ているため、実現に向けたサポートを強化してゆく必要がある。

### (4) 次年度以降の行動計画（＝次年度末点検項目／次年度事業計画）

#### 1 教育・学生支援について

##### ●重点項目

- (1) 新カリキュラムの満足度調査結果に基づいて、各フィールドの構成科目等の点検を行い、必要に応じて科目の追加や廃止等の整理を進める。
- (2) サークル・委員会活動への参加者が伸びない状況にあるため、特に大学祭実行委員会への参加を促して学生生活の充実を図るとともに、キャンパス全体のイベント活性化に貢献する。
- (3) 学生課と協力しながら各種インターンシップの受け入れ先を増やし、多様化する学生の進路に応じた就活支援をさらに手厚く行う。

##### ●新規項目

- (1) 社会的に注目を集めている生成系 AI に対する理解を深め、適切に活用できるよう、各授業内での AI 利用機会を増やす。

- (2) 協定を結んだ韓国の大学（又松大学、清州大学）への編入実績をあげる。
- (3) 共学化に伴う学科内での課題や改善点を確認し、検討のうえ対応を進める。

●継続項目

- (1) ゼミ教員による個別面談の時間を増やして多様化する学生のニーズをより詳しく把握し、一人一人の特性に応じた親身な支援を行うことで、学生が意欲的に学び、就職活動をスムーズにスタートできるように指導をする。
- (2) 学生の満足度を継続して客観的に測定し、教員の授業改善や学生指導方法改善などに反映させる。
- (3) カリキュラムの基本的な考え方の一つである「講義＋資格・検定＋研修」のバランスのとれた学習が実現できるような実践的な教養教育づくりに取り組む。
- (4) より楽しく、学びがある学科づくりに取り組み、より魅力的な教養教育の創造に挑戦する。
- (5) 四年制大学への編入学に関する情報を収集し、編入学を希望する学生に対する具体的な支援について検討し、編入実績を上げる。

## 2 学生募集について

●重点項目

受験生の「韓国フィールドにおける学び」に対する興味関心が極めて高くなっているため、韓国フィールドの各科目の満足度を高めるとともに、夏期の韓国研修への参加者をさらに増やすことで入試広報につなげる。

●新規項目

- (1) 四年制大学への編入実績を増やすことで、〈大学3年次での進路選択〉という短大ならではの強みをアピールする。
- (2) 韓国の大学への編入実績を作り、専門学校進学希望者に向けて、ファッションやメイク、調理、ペットなどの分野を韓国の大学でも専門的に学ぶこと、海外の大学への留学経験が就活面でも有利になることをアピールする。
- (3) 「英語コミュニケーションフィールド（仮）」の新設によって英語に関する学びを強化し、教養教育の国際性をアピールする。

●継続項目

- (1) 社会人に向けて「学び直し／リスキリング」のための場としての現代教養学科をアピールし、多様な学生を受け入れる仕組みを広報する。
- (2) 桜花学園高校との連携を活発に行い、内部進学者を再び増やす。
- (3) 学科の教育内容、行事などを的確、かつ迅速にホームページの学科ブログ、YouTube、ツイッター、インスタグラム、ニュースレター等で広報する。

# 桜花学園 中長期計画 (2024年度～2028年度)

## 現代教養学科

### 1. 学生・生徒・園児募集における広報強化策

[5年間の数値目標]

	2024年	2025年	2026年	2027年	2028年
入学者 目標値 (人)	50	50	50	50	50
入学定員 (人)	50	50	50	50	50

※目標値は、それぞれの該当年度4月の入学者数

[対応策]

2024年度の入学者見込み数は、2024年2月時点で48人であり、定員の50名まであと一歩というところまで来ている。2022年度から入学者は少しずつ増加しており、この理由と考えられるのは学科をあげて「韓国フィールド」をアピールしていることである。面接の際に受験生の多くが現教での韓国の学びに強い魅力を感じていると語っていることから、この方針を継続していくことで定員を確保できると考えられる。

### 2. 教育・研究活動における新たな魅力の創出

世界的に注目されている最新技術である「生成系AI」を学科教育でも導入するべく、まずは学科教員が研修等を重ねて知識を共有するとともに技術的・倫理的な理解を深め、多くの授業で積極的に利用していきたい。

### 3. 満足度の向上（就職支援、進路支援、学生生活等）

年度末に学科で実施している満足度調査およびIR室が実施している学生アンケートの結果をみると、現代教養学科の学生の満足度はキャンパスの全学科のなかでもトップの高さであり、現在の学科教育・就活支援等が機能しているといえる。今後も慢心することなく、常に見直しと改善を行いながら高水準の満足度を維持していきたい。

### 4. 社会からの要請への対応（地域連携、グローバル化等）

現代教養学科では近年の社会的な要請を受けて、長期履修制度の導入に向けて準備を進めてきたが、今後数年は学内で新学科の設置や学科再編などによる大きな変化が予想されるため、長期履修制度の導入については先送りを決めたところである。

その代わりに、社会人入試の制度を広報することで、社会人のリスキングの機会を提供し、地域社会に貢献していきたいと考えている。

<b>学科名・ 委員会名</b>	<b>教務委員会</b>
<p><b>(1) 学習成果の評価と改善計画</b></p> <p>新型コロナの感染症法上の分類が5類に以降されたのを受け、通常通りの授業形態に戻った。これまで実施が制限された演習などによる学生の意見交換や学外授業も徐々に再開できた。</p> <p>例年実施している授業アンケートは、若干項目を見直し2年目であることから、これまで通りの評価項目で実施した。しかし、webによる実施に転換以降、回答率が極めて低い現状に改善が見られなかったことは大きな課題である。特に自由記述の回答は多くを得られず、至急実施方法の改善が必要である。</p> <p>学納金未納による除籍対象学生は引き続きに多かったことは大変残念である。これらの学生はゼミ担任や学生課を通して個別に指導を行ったが、除籍審議に至る前に相談にのるシステムの構築が必要であろう。この点については学務部(教務課、学生課)、学生委員会とも連携して課題解決に努めたい。</p> <p>一方、専攻科保育専攻並びに英語コミュニケーション学科、現代教養学科ではそれぞれオーストラリア、イギリス、韓国等への海外研修を再開した。本学の特徴のひとつである国際力を身につける機会を失っていたが、今後は国際交流支援センターとも連携して円滑な留学支援に努めたい。</p> <p>また、本学の特長であるゼミ活動では、特に現代教養学科における「現教フェス」は学生の主体性を引き出す取り組みとして大きな成果を得たものと考えられる。</p> <p>保育科の保育実習、教育実習、英語コミュニケーション学科の教育実習も概ね予定通り実施できたが、特に保育科の保育所、幼稚園、施設実習の一部が感染症の影響により一部制限されたものもあった。それらについては学内外における補充実習等により代替した。新年度は完全実施となると思われるが、引き続き教育・保育職支援センターや各学科実習担当者との連携が必要である。</p> <p>また、学園の将来構想を見据え、英語コミュニケーション学科における科目の改変にも着手しており、現代教養学科との統合に向けて準備が進んでいる。</p> <p><b>評価に用いた指標 (資料名)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>レ卒業・休退学等のデータ</li> <li>レ単位取得関係のデータ・GPA</li> <li>レ免許・資格取得のデータ</li> <li>レ授業評価アンケート</li> </ul>	

## (2) 今年度の活動内容の評価と改善計画

### シラバス記載事項の中間点検

シラバス通りに授業を実施することは学生に学習の指標を示すばかりでなく、教員自身が学生に対する評価の観点を認識する重要な位置付けであることは言うまでもない。しかし、十分に活かせていなかったり、学生・教員双方が十分にその内容を意識していなかったりとその活用状況は十分とはいえない。保育科、英語コミュニケーション学科の教職科目は十分な教授内容であるか改めて点検する必要があるし、保育科の保育士養成課程は告示に沿っているかの確認をする必要がある。さらに現代教養学科は多様な学びの場を提供するため、他学科との相互開講科目も複数あることから、それぞれの科目が学科のCPに沿ったものなのか確認が必要である。いずれもシラバス通りに授業が進行しているか授業の中間地点での点検の必要性を窺わせる課題であることから、今後の検討が必要である。

### カリキュラム改正

専攻科保育専攻留学タイプの募集停止と桜花学園大学保育学部国際教養こども学科への編入枠利用を具体化させるための実務レベルの協議を行ったが、相互の認識に齟齬があったことなどから遅々として進まない現状があったのは非常に残念であった。学園として学生にとっての最善を見出し、そこにむかって同じベクトルで作業をする必要があったのでは無いかと反省を禁じ得ない。今後は相互のコミュニケーションを密にし、学生に対しての最大限の学習機会の確保を目指す必要性があると考え

### 開講クラス数の見直し

学生数減少のため、各科の演習科目（情報系、語学系）において開講クラスの見直しを行った。そのため非常勤講師の配置を見直さざるを得なかったが、十分な説明をして理解を得た。令和6年度の入学者はさらに減少することから適正クラス数を各学科で検討することとしている。

入学者の減少は学納金収入の減少に繋がり、我々教務委員会も例外なくコスト意識を持たなければならないと強く認識している。そのため、適正規模のクラス数にするとともに、特に主要科目は専任教員が担当することを徹底するなど、今あるリソースを活用することを常に考えて行かななければならないと考えられる。

### (3) 年度末点検結果と継続課題

令和6年度において特に大きな課題として今後取り組まなければならないのは授業評価アンケートの回収率の向上と結果の反映である。

まず、回収率の向上に向けて今後教務委員会で議論するところだが、web 回答の妥当性も含めてゼロベースで検討する必要があると考えている。

また、アンケートの活かし方だが、如何せん回答率が低かったため、その回答を授業の質向上に十分に活かすことができていない。だが、回答率が向上すれば授業の質向上に十分寄与することが可能であるため、FD 委員会等により回答の分析を試みる必要があるものと考えている。

- (基準Ⅰ-C) 学習成果の査定において、学科毎に独自の手法があったり、新しい評価方法を取り入れたりしているが、そのような情報が学科間で十分に共有されていない。学習成果の査定方法や教育改善の取り組み状況について各学科が互いに情報交換する機会を設けることが必要である。

当該記載については、新型コロナ対応に終始したこれまでの3年間では十分な情報共有ができていない。また、資格免許の取得を主な目的とする保育科と教養教育を重視する英語コミュニケーション学科、現代教養学科では学習成果を査定する共通項を見出しにくいのも事実である。

令和6年度にあっては引き続き情報共有と意見交換を行い、学習成果の査定の手法のあり方について模索したい。

- (基準Ⅱ-A) 単位の実質化；履修登録単位数の上限制度や教育課程の改善

単位の实質化については、現代教養学科のカリキュラム編成によって単位数の見直しを行っているが、保育科、英語コミュニケーション学科では十分な議論に至っていない。特に保育科は資格免許の必修科目が多く、自由裁量で決められる科目が限られていることから難しい面も否定できない。今後も十分な学習成果を担保できるよう「スクラップアンドビルド」の観点で見直しを継続したい。

- (基準Ⅱ-) 適正なシラバス表記

シラバス表記については引き続き教務委員を中心に点検を行っている。令和5年度に実施された認証評価にあっては「15 回目のテスト」が問題視された科目が英語コミュニケーション学科に1科目あったが、現在は改善されている。今後にあっても文科省等関係省庁の基準に従い適正表記に努めていく。

- (基準Ⅱ-B) 基礎学力が不足する学生への補習、進度の早い学生に対する支援

当該の補習・支援についてはゼミ担当者に指導を委ねている側面が過分にあるが、各学科において基礎学力の底上げは喫緊の課題であると認識している。他方、単位の实質化等の課題もあり新たな科目を起こすことは考えにくい。保育科

では教育保育職支援センターによって実習に躓く学生のフォローをしている。また、現代教養学科、英語コミュニケーション学科では少人数教育の利点を活かしたゼミ教員のきめ細かな指導により基礎学力の向上を目指している。いずれも教員に過大な負荷をかけることとなることから、各学科で望ましい方向性を見出すようその判断を委ねたい。

**(4) 次年度以降の行動計画（＝次年度末点検項目）**

- 授業アンケート項目の精査
- 授業アンケート実施方法の見直し
- 授業アンケートの結果をいかに授業改善に活かすかの検討
- 基礎学力が不足する学生への支援のあり方の検討
- 単位の実質化に向けたカリキュラムの見直し（継続）
- 授業開講クラス数の適正配置の検討（継続）

<p>学科名・ 委員会名</p>	<p>学生委員会</p>
<p>(1) 学習成果の評価と改善計画</p> <p>①課外活動への支援</p> <p>学生の課外活動（委員会・サークル活動）への参加状況については毎年度5月教授会に報告している。2021年度から2023年度までの委員会・サークル活動への加入率は2021年度86.4%、2022年度85.7%、2023年度64.5%である。コロナウイルス流行前の水準に戻ることはまだできていない。また、登録されているものの、実質的に活動している委員会・サークルも50%に過ぎない。その原因として、学生数の減少や学生の課外活動に対する意識の変化、コロナ禍で中学・高校生時代に課外活動が制限され自主的な組織活動の経験が少ない学生たちの入学、そしてコロナ禍による委員会・サークルの大幅な活動量の低下による運営ノウハウ継承の断絶などが考えられる。</p> <p>②進路決定状況</p> <p>進路決定状況の直近3か年の報告は、毎年度4月教授会において報告しているほか、毎年1月から毎月の教授会において直近の進路決定状況を報告するとともに、未決定学生への支援等を各ゼミ教員に求めた。</p> <p>2021年度から2023年度の各年度末における進路決定率は、以下の通りである。</p> <p>保育科は、2021年度：100%、2022年度：100%、2023年度：100%である。現代教養学科は、2021年度：90.4%、2022年度：94.5%、2023年度：88.9%であった。英語コミュニケーション学科は、2021年度：81.6%、2021年度：92.5%、2023年度：95.2%であった。</p> <p>③障がい学生への支援について</p> <p>昨年度の連合教授会で決定された規程に基づき、障がい学生への支援を組織的に行った。</p> <p>まず、特別支援制度については、学生からの申請にもとづいて特別支援部会を開催した。そこではその必要性と内容について検討し、必要と認められたものについては特別支援を実施した。2023年度の特別支援部会は5回開催し、特別支援が認められた学生は前期5名、後期7名、計12であった。申請の相談を受けたものの中には、特別支援の対象とはならないものもあった。</p> <p>アクセシビリティ推進委員会は規程に基づき、前後期各1回、計3回開催した。そのなかで、昨年度決定した障がい学生の支援の現状について情報を共有した。そのなかで当該障がい学生の状況から現状としては学生SAが必要とされていないこと、授業等では同じ講義を受講している学生がピアサポーターとしての働きをしていることなどが報告された。</p>	

#### ④ 学生生活支援のあり方について

2023 年度も卒業生満足度調査を IR 室が全学科で実施し、その集計結果を各学科、事務局で共有・検討し、学習支援の改善に活かしている。

全体的な満足度としては、「名古屋短期大学に入学したことに満足しているか」という設問に対して「とても満足した」は保育科：67.4%、現代教養学科：44.4%、英語コミュニケーション学科：58.3%、平均すると 56.7%であり、「やや満足」と合わせると 97.9%である。このことから名古屋短期大学に入学したことに對して多くの学生が卒業時には概ね満足していると言える。また、「進路が決定するまでの有益だったサポート」では、各学科や学生課の実施する「キャリアガイダンス、各種セミナー、対策講座」が 32%と最も高い。続いて「ゼミ教員の指導」：21.3%、「職員や就職カウンセラーとの相談」：19.4%である。学生にとっては大学全体の就職支援に加えて、各ゼミ教員や職員等による支援が有益であることが示された。

#### 評価に用いた指標（資料名）

- 満足度調査結果
- 学生アンケート
- 学生アンケート結果報告書
- 2023 年度連合学生委員会資料
- 2023 年度連合教授会資料

## (2) 今年度の活動内容の評価と改善計画

### ①① 課外活動への支援

課外活動の活性化を促すために、「二者懇」を開催し、委員会・サークル活動への支援を行った。主なものは、学生会との二者懇を、学生大会やリーダーズキャンプなどを中心に 10 回、大学祭実行委員会との二者懇を、名桜祭の準備・運営を中心に 48 回、新入生歓迎実行委員会との二者懇を、新歓行事や OC 時の活動を中心に 20 回、卒業を祝う会実行委員会との二者懇を、卒業を祝う会の準備・運営を中心に 10 回行った。また、二者懇以外にも随時、学生たちの相談・支援に当たった。

その結果、様々な問題をかかえつつも、徐々にではあるが、各委員会・サークル活動は活性化しつつあるといえよう。

課外活動は社会人基礎力の強化に役立つこと、進路就職決定状況の改善をさらに促すとともに、活気にあふれたキャンパスというイメージを創り出し、広報活動にも効果的であると考えられる。よって今後も課外活動の活性化のためにあらゆる手段を講じる必要がある。引き続き、二者懇を軸に個別的な指導を強化することによって「やりがいある」課外活動づくりを支援するとともに、各委員会・サークルの募集活動の通年化やキャンパスにおける露出度の向上などを通じて、加入学生を増やす取り組みを強化するよう、各委員会・サークルに働きかける。

### ② 進路決定状況

進路決定状況について、保育科学生の就職先である保育士等の募集状況はコロナ禍であってもあまり影響を受けなかったが、一般企業の募集は減少したため、2021年度は一時的に就職状況が悪化したが、2022年度以降の募集は改善しつつあ、就職決定率が上昇している。ただ、民間企業等への就職を主な新とする現代教養学科と英語コミュニケーション学科の学生数の減少にともない、学内合同企業説明会への参加学生が大幅に減少している。この影響は当然、これまでの就職支援のあり方に変更を求める可能性がある。就活開始時期の分散など、学生の就職に対する意識も大きく変化していることもあり、ますます、学生ひとり一人の状況に応じた個別の支援を充実させる必要性が高まっている。

#### ③障がい学生への支援について

まず、特別支援制度については、申請の相談を受けたものの中には、特別支援の対象とはならないものもあった。この制度のさらなる理解を教職員、学生の間を広げる取り組みが必要である。

アクセシビリティ推進委員会では障がい学生の支援の現状について情報を共有するなかで、SA制度が果たすべき役割に制限がないことや、TA制度との重複があることなどから、SA制度についてあらためて整理をする必要があることが指摘された。

#### ④学生生活支援のあり方について

2023年度も卒業生満足度調査によると、学生にとっては学生課、保育職・教育職支援センターによるガイダンス等の支援に加えて、各学科、各ゼミ教員や職員等による個別的な支援が有益であることが示された。学生の進路決定においては、各学科や学生課、そしてゼミ教員による支援という3本柱による、連携した支援を今後も引き続いて行っていく必要がある。そして、さらなる満足度の高い、効果的なガイダンスの実施、個別相談ができるよう、各部署、各教職員が能力の向上に努めることが求められる。

### (3) 年度末の点検結果と継続課題

#### ①障がい学生支援体制の強化

本年度より「特別支援」を開始した。学生の申請理由は発達障害や全盲などであり、特別支援として施設整備や座席配置などの配慮を決定し、授業担当者に求めた。課題としては「特別支援の対象とすべき要件」について明らかにするとともに、教職員や学生に広く周知し理解を求めることがある。

#### ②アクセシビリティ推進委員会の運営により、体制の補完

対象となった障がい学生の状況について当該学部学科、担当教員から連合教授会に報告するよう依頼した。また、点字プリンターなど障がい学生の受講を保障するための機器の運用状況についても報告を依頼した。このなかでピアサポーターの重要性が指摘された。ただ、その募集・養成・運営のノウハウや担当者などについて、さらに議論を深める必要があることが指摘された。

#### ③就職支援の充実、④学生課や各学科、教育・保育職支援センター等との連携

学生の編入、就職等進路決定については高い成果を引き続き得ている。引き続き、各種ガイダンスの効果的な実施、個別相談などを学生課、学科、ゼミ担当教員、教育・保育職センターなどの関係者が連携を深めながら実施することが必要である。

#### ⑤卒業生の進路先からの評価の聴取

卒業生の全進路先を対象としたアンケートなどは実施していない。しかし、保育・教育職、企業ともに、実習やインターンシップなどの普段の学外における教育活動を通して人事担当者や現場の上司と学生課職員、各学科教員が交流したり、実際に教科教育に招く機会が多くある。それらの機会に卒業生の動静や業務遂行能力などについての評価をいただくことが多い。そこで得られた就職先の各種知見は各学科教育の充実や進路決定支援の見直しに活かされている。

### (4) 次年度以降の行動計画（＝次年度末点検項目／次年度事業計画）

#### ①課外活動への支援

#### ②障がい学生支援体制の強化、アクセシビリティ推進委員会による体制の補完

#### ③就職支援の充実、学生課や各学科、教育・保育職支援センター等との連携

#### ④卒業生の進路先からの評価の聴取

<p>学科名・ 委員会名</p>	<p>入試委員会</p>
<p>(1) 学習成果の評価と改善計画</p> <p>入学者受け入れの方針について、学科のアドミッションポリシーは入試ガイドやHP、各選抜試験のアドミッションポリシーについては公式ウェブサイトに記載することによって、入学前の学習成果の把握・評価について具体的に示した。また、大学進学相談会、オープンキャンパス（対面方式及びオンライン方式）では、入学志望者と保護者に直接説明している。本年度は、近隣県内の高校の進路担当教員を対象とした「入試説明会」を本学8号館新校舎で開催し、アドミッションポリシーや各学科の魅力、入学試験の概要について、短大入試委員長が明確に説明した。</p> <p>推薦系の選抜においては、入学前の学習成果としての内申点を点数評価して出願資格を制限しているほか、英語コミュニケーション学科では、面接を伴う入試において外部機関による英語能力試験の受検状況を把握し、これらの一定以上の取得級や点数を受験資格としているなど、入学前の学習成果の把握・評価を明確に示した。</p> <p>入学者選抜の方法及び入学者受け入れの方針は学科ごとに策定され、入試委員会においてその整合性を確認した。また、入学者受入の方針に対応した入学者選抜の方法は公式ウェブサイトで明示している通りであり、入学者選抜の方法は、入学者受け入れの方針に対応した。各学科の令和6年度入試の結果と分析、課題は以下の通りである。</p> <p>保育科</p> <p>① 入試結果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 入学者数（定員 200 名）：149 名（前年度：158 名）</li> </ul> <p>② 分析</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 2024 年度選抜試験での単願入試（さくら選抜、自己推薦、指定校、桜花高校指定校）の受験者数は 140 名であったが、2023 年度での単願入試受験者は 142 名であり、昨年とほぼ変わらない受験者数である。しかしながら、2023 年度は後半の入学試験において 17 名の入学があったが、2024 年度は入学者が到達しないことを予測しており、定員充足は見込まれない。</li> <li>➤ 受験者増加につなげるため、今年度は自己推薦を 1 回から 2 回に増やし、自己アピール方法も従来の 1 種類から 4 種類へと増やすことで、高校生が受験してみたいと思える内容を検討し実施した。また、変更点については、毎回の OC で高校生にアピールし、受験内容の説明を詳しく行った。その結果、2023 年度入試では 21 名の受験者に対し、2024 年度入試では、45 名の受験者があった。その一方、さくら選抜が振るわなかった。さくら選抜にも受験者が集まるように各入試のアドミッションポリシーを明確に提示し、その魅力を発信していくことが課題として残った。</li> <li>➤ 今年度も Instagram を頻繁に発信したが、更に情報発信に注力する。今年度は、</li> </ul>	

新たにオンライン OC の導入を計ったが、参加者が大変少なく、申し込みがあっても当日欠席ということが複数回あった。このような参加の見通しが立たないオンライン OC よりも対面 OC やその宣伝 (HP, SNS など) に力を入れる必要があるだろう。対面での OC 参加者の減少が、受験者減少と連関していると思われるため、ナイト OC などに挙げられるような、魅力的な参加型内容の企画を検討する必要がある。

### ③ 課題

- 2024 年度より共学となり、男子学生 2 名が入学するが、さらに多くの獲得の方法を検討する。
- 2024 年度自己推薦入試は、45 名の受験者があり (昨年度 21 名) 大幅に増えたが、さくら選抜が下がったため、来年度は同日に自己推薦とさくら選抜を開催することにより、受験者がアピールしやすい入試方法が選べるように日程を調整する。また、上記 2 つの入試を合併させた日程を 2 度実施することによって、受験者増を図る。
- 学士取得のための専攻科のメリットもさらに伝えていく必要がある。開拓先としては、通信制高校への情報発信も含めて高校訪問を進めていく。

## 英語コミュニケーション学科

### ① 入試結果

- 入学者数 (定員 50 名) : 35 名 (前年度 : 25 名)

### ② 分析

- 全国の短大希望者数減少の影響下、受験者総数が 3 年続きの減少であるが、入学予定者数は大幅に増加した。その理由としては、短大の数が減っているため、地方からの志願者数が増加していることも考えられる。また、外国にルーツを持つ志願者が増加していることも特徴の一つとして挙げられた。
- 今年度は新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けず、海外留学プログラムを完全に復活させることができた。本学を含め英語を専攻する学部学科の志願者は、全国的に増加傾向を示している。また、エアライン・ホテル・旅行・観光分野における就職内定率も著しく改善した。一方、円高や景気動向が留学希望に与える影響はまだ大きく、短大志願者数がさらに激減していることもあり、入学予定者数の目標を達成することができなかった。

### ③ 課題

- 受験者確保が必須であり、引き続き短大に対する肯定的イメージ・アップを図り、短大進学率の高い地域へのアプローチを強化する。
- 円安・物価高騰が続く中、経済的負担を軽減できる海外研修の開拓を進める。また、多様な期間や目的での留学を模索する。

- 留学以外の英語学習の魅力を発掘する。改編予定のカリキュラムに基づき、英語を学ぶ学生の募集方法を検討する。

## 現代教養学科

### ① 入試結果

- 入学者数（定員 50 名）：49 名（前年度：39 名）

### ② 分析

- オープンキャンパスの参加者が前年度から 7 名増加した。その流れが、前半入試の受験者増加につながったと考えられる。OC では、学生主体という特性をより強く打ち出し、高校生と学生が 1 対 1 で関わる機会を多く作った。また、模擬授業時間帯に、別室で保護者に対する説明会を実施し、その後、保護者と教員が個別に話す機会を設ける等、丁寧な対応を行った。
- 高校訪問によって、新カリキュラムが高校に浸透したことの成果なのか、明確な理由は分からないが、指定校推薦合格者が 13 名から 20 名に増加した。
- さくら選抜・指定校では韓国関係のプログラムに関心をもつ生徒が多いことが伺えた。引き続き積極的に PR することが受験生の増加につながるであろう。
- キャリアデザイン評価型選抜の志願者を増やす課題に対応すべく、2025 年度入試より、提出物の「推薦書」を外すことで、「学校推薦型選抜」から「総合型選抜」に変更する。9 月にも入試の機会を設け、志願者増を図る。
- Web メディアを用いた検索で「名短」や「現代教養学科」がヒットするような方策として、学科ブログの記事の中で、ハッシュタグを模した形で、学科のキーワードを明示した。

### ③ 課題

- 学生主体での OC をこれからも実施し、高校生や保護者へ丁寧に対応する。
- 社会人学生を増やすことが、入学者確保に重要であるため、社会人に対する広報を行う。
- Web メディアを用いた検索で「名短」や「現代教養学科」がヒットするような方策を継続検討する。
- 社会人学生を増やすことが、入学者確保に重要であるため、社会人に対する広報を行う。
- 高校訪問や資料の郵送等、高校教員や生徒に積極的にアプローチする。

## 評価に用いた指標（資料名）

- 選抜試験結果

## (2) 今年度の活動内容の評価と改善計画

### 1. オープンキャンパス（対面及びオンライン）の開催回数について

一人でも受験生を確保するために、オープンキャンパスの開催回数を増加させた。

#### 対面オープンキャンパス

	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年
回数	6回	5回 (+2 Web)	8回	10回	7回

\*2021年度は2022年3月に春の相談会としての開催を含む（オープンキャンパスの名称は不使用）

\*2022年度は2022年4月に春の相談会として開催、更に2023年3月に正式なオープンキャンパスとして2回開催した

#### オンライン・キャンパス（Zoomを使用したオープンキャンパス）

	保育科	英コミ	現教
2022年	0回	6回計画 4回実施 5/15, 6/19, 7/24, 9/18	6回計画 4回実施 6/19, 8/21, 9/18, 10/16
2023年	7回	7回	7回

\*2021年度は、8月に4回計画、9月に2回計画、10月に1回計画

\*2022年度は、5月、6月、7月、8月、9月、10月に以下ずつ計画（定例化した）

対面に加えて、令和5年度は保育科もオンラインキャンパス（オンライン版OC）を定例化し、5月～10月に1回ずつ開催した。全体として最終的な入学者は昨年度より減ったものの、オープンキャンパスは本学を知ってもらう絶好の機会であるため、次年度以降も精力的にオープンキャンパスを開催し、受験者および入学者確保につなげたい。

### 2. オープンキャンパスの実施形態について

令和3年度より、入試委員会において「複数学科への行き来ができるオープンキャンパスプログラムの実現」「参加者の拘束時間を減らしたプログラムの実現」などの提案があったため、令和5年3月開催のオープンキャンパスから新形式で実施を決定した。様々な問題も挙がったが、新形式での実施が定着しつつある。

8号館の使用が開始されたことから、学科間移動や総合案内コーナーの新設など、参加者により魅力的な開催が提案され、開催場所が各学科の使いやすい場所で固定されてきた。引き続き、より良い開催形態を模索していきたい。

### 3. 授業公開の再開

高校教員に本学を知ってもらう機会を設けるため、入試説明会が学外開催になって以降行っていなかった「授業公開」を復活させた。参加人数は少なかったものの対話しながら授業をアピールできる機会であるため、次年度も継続予定である。

### 4. 入学者選抜の変更（定員と試験内容）

2025年度入試に向けて、定員の見直しと試験内容の検討を行った。学科のポリシーに基づいた新しい試験内容が提案され、委員会で議論の後に承認した。

一般IV期の受験者が2023年度入試は1名、2024年度入試は6名に増加した。

### 5. 桜花学園高等学校との連携事業や行事開催について

付属高校のリクエストに全面的に応えていく方針で連携事業の促進を図った。OCの参加者が軒並み減少していることから、両大学入試委員長と高校2年主任担当との連携イベントとして、対面OC終了後の午後、桜花高校卒業生による「キャンパス

ライフを語る」を行った。

その他、桜花高校が開催する1日保育園イベントへの講評者の派遣、桜花高校1年生が大学キャンパスを訪問する授業参加に附属幼稚園での活動も加えたことにより、系列大学への入学を具体的にイメージできる戦略を目指して前向きに取り組んだ。これらの事業において、高校教員との対話を積極的に行い、120周年記念行事においてもネットワーキングを続けた。これらの高等学校進路指導部とのコミュニケーションの改善に向けて取り組んだことも影響し、保育系以外の学部学科への受験も促された。昨年度の自己評価にあった「前途多難である」という部分は改善されていると言える。桜花学園高校との連携関係は、引き続き維持したいところである。

### (3) 年度末点検結果と継続課題

#### (4) 次年度以降の行動計画（＝次年度末点検項目）

- 入試毎の AP の整合性チェック
- 効果的なオープンキャンパス（対面・オンライン）の開催
- 受験者および入学者数の改善

<p>学科名・ 委員会名</p>	<p>図書館運営委員会</p>
<p>(2) 今年度の活動内容の評価と改善計画</p> <p>(1) の①施設・体制の整備、②資料の収集と更新、③教育諸活動への支援、④ガイダンス・広報活動の充実、ごとにまとめると次の通りである。</p> <p>1. 改善計画（新たに取り組んだこと）</p> <p>①施設・体制の整備 トイレの清掃による清潔さの維持。</p> <p>②資料の収集と更新 ・保育科保育専攻のカリキュラムに「宮沢賢治」がある為、宮沢賢治関係資料の充実 ・ゼミごとの学生選書ツアーの随時開催</p> <p>③図書館の機能を活用した教育諸活動への支援 ・大学・短大による講演会等のイベント開催に合わせた展示コーナーの設置</p> <p>④ガイダンス・広報活動 ・科目「日本語表現」授業内でのガイダンス開催 ・保育科一年生における、図書ガイダンスの強化 ・キャンパス内の各号館正面玄関での掲示 ・人文学系の講義における図書館の積極的利用</p> <p>2. 結果と評価</p> <p>①施設・体制の整備</p> <p>【1】結果</p> <p>1) 開館日数と開館時間の状況について 開館日数 273 日 開館時間&lt;授業期&gt; (月・火・木・金曜日) 8:40~18:30 (水曜日) 8:40~17:30 (土曜日) 8:40~16:00 &lt;休業期&gt; (平日) 9:00~16:50 (土曜日) 9:00~13:00</p> <p>2) 利用状況 総入館者数 14051 人 その内訳、学生 (保育科 3996 人、英コミ科 1286 人、現教科 1184 人、専攻科 1106 人)、学外者 1121 人 2023 年度の 1 日平均の入館数 (保育科 7,8 人、英コミ科 2,5 人、現教科 2,4 人)</p> <p>3) 施設の整備 トイレの清掃による清潔さの維持。</p> <p>【2】改善活動への評価 前年、カーペットの色が変わり、図書館が明るいイメージになった。</p> <p>②資料の収集と更新</p> <p>【1】結果</p> <p>1) 蔵書の更新状況 受け入れ数 2951 冊、除籍 1052 冊 (不明を含む)</p>	

年度末における蔵書数 243711 冊

2) その他資料

視聴覚資料

受け入れ数 69 点、除籍 0 点

年度末における蔵書数 8,469 点

【2】改善活動への評価

・新たに韓国関係資料コーナーを設けた。利用者がブラウジングするコーナーの一つとなっている。学生選書ツアーをゼミ単位で開催することで参加者が増えた。

③図書館の機能を活用した教育諸活動への支援

【1】結果

1) 取り組み

A. 現代教養学科における「読書のすすめ」活動への協力

教員と打ち合わせ、授業の展開に合わせて選書ツアーの実施、学生が作成した POP の館内展示を行った。

B. 教員と連携した講演会等のイベントに合わせた展示コーナーの設置

保育科の創作絵本コンクールの受賞作品の展示や授業で学生によるポップの制作作品を豊明市立図書館へ展示した作品の展示。チャイルドエデュケア研究所の「冬の講演会」の講演者の著書の展示等を実施した。教員の近著紹介。

【2】改善活動への評価

A. 現代教養学科における「読書のすすめ」教育が定着し、さらに「ビブリオバトル」という新しい取り組みへの発展を支援した。このことを通して現教生の読書に対する苦手意識を緩和することができた。また、この取り組みの中で、POP 作成を依頼することにより、広報事務の軽減と質の向上に役立てることができた。

B. 保育科における絵本製作の奨励により、主に児童文化財関係の書籍に、学生の興味が集中した。

C. 各号館の玄関に展示コーナーやデータベースの使い方の掲示をした。

④ガイダンス・広報活動

【1】結果

1) 図書館報の発行

発行回数 1 回、72 号内容：「展示コーナーの紹介」「電子書籍の紹介」「図書館ボランティアについて」「季節に関する書籍の紹介」

2) 掲示板の利用

2～3ヶ月ごとの不定期更新

内容：

3) ガイダンスの実施

A. 実施形態

対面とオンデマンドで実施

### (3) 年度末点検結果

①より多様な学内ニーズに対応し、図書館の機能を活かした教育支援を図る。

(結果)

- ・電子書籍利用の利便化等において、機能を発揮できた。
- ・今後、より他方面での支援を続けることが肝要。

②図書館インターンシップの具体化をはかり、年度内の実施を目指す。

- ・図書館としてはインターンシップの要項を作成し、現代教養学科に依頼したが、応募者はなかった。

### (4) 次年度以降の行動計画（＝次年度末点検項目／次年度事業計画）

- (1) 施設・体制の整備については、複数年度に跨り整備を進めてゆく。
- (2) 資料の収集と更新については、ムードル等を用いた一層のIT化の推進を図る。
- (3) 図書館の機能を活用した教育諸活動への支援については、主に教育活動における図書館活動の活性化を基軸に粘り強く、支援を続ける。
- (4) ガイダンス・広報活動については、掲示板の有効活用を基軸に、活動を継続する。

<b>学科名・ 委員会名</b>	<b>大学評価委員会</b>
<b>(1) 学習成果の評価と改善計画</b>  <p style="text-align: center;">該当なし</p>	
<b>(2) 今年度の活動内容の評価と改善計画</b> <p>令和5年度の活動について、「名古屋短期大学 内部質保証の流れ」に沿って、年度末の各会議において自己点検・評価を行った。また、これまで用いていた大学・短期大学基準協会の認証評価の様式ではなく、新たな様式（本様式）を用いて令和5年度自己点検・評価報告書を作成した。この変更の目的は、自己点検・評価の実質化と業務の合理化を図るためであった。各学科・委員会等では、これまでもそれぞれの取り組みの時期において行った点検・評価結果を改善に資するとともに年度末に1年間の取り組みの総括をしていたが、自己点検・評価報告書の作成時期が翌年度の中旬以降であったため、実際の点検・評価・改善の内容が自己点検・評価報告書に反映されないことがあった。点検・評価の時期と様式を変更したことにより、この点は一部改善されたと思われる。一方で、この方法による自己点検・評価が本学の教育研究の改善につながっているかについては、まだ十分な検証ができておらず、今後の課題である。</p>	
<b>(3) 令和5年度末点検結果と継続課題</b> <input type="checkbox"/> 令和4年度認証評価で得られた課題への対応 <p>シラバスの記載事項については、概ね対応が完了した。また、学籍異動については、学則に定められた通りに教授会で扱うように修正した。財務体質の改善については、継続課題である。</p> <input type="checkbox"/> 前年度の行動計画の実施状況についての点検・評価 <p>令和5年度自己点検・評価報告書の様式を変更し、各委員会・学科が掲げた計画の実施状況を確認するような様式にした。これにより、一定の成果は見られたものの、年度末に点検するのみとなっている計画も多く認められた。掲げた課題を年間通して意識し、対応することができるよう、さらなる工夫が必要である。</p>	
<b>(4) 令和6年度以降の行動計画（＝令和6年度末点検項目）</b> <input type="checkbox"/> 前年度の行動計画の実施状況についての点検・評価 <input type="checkbox"/> 認証評価の第4評価期間に向けた対応	

<p>学科名・ 委員会名</p>	<p>将来計画検討委員会</p>
<p>(1) 学習成果の評価と改善計画</p> <p><input type="checkbox"/>各学科の3ポリシーを本年度早期に総点検し、各学科の実態に合わせた文言に修正した。</p> <p>評価に用いた指標（資料名）</p> <p><input type="checkbox"/>満足度調査結果</p>	
<p>(2) 今年度の活動内容の評価と改善計画</p> <p><input type="checkbox"/>名古屋キャンパスにおけるダイバーシティ&amp;インクルージョン実現宣言（仮）の発出に向けた検討</p> <p><input type="checkbox"/>本委員会の機能強化に向けて施策検討（関連規程の改正など）</p> <p><input type="checkbox"/>さらなる学生募集に向けた魅力的な教育体制の検討</p> <p><input type="checkbox"/>地域貢献としてのリカレント教育体制強化のための広報宣伝の実施</p> <p>★以下の事項について検討するよう関連部署に働きかける。</p> <p><input type="checkbox"/>科研バイアウト制度の導入と関連して科研不採択時は学園特別研究費に自動採用するなどのインセンティブ新設</p> <p><input type="checkbox"/>教職員の職位要件の再検討とあわせて採用・昇任時における実務家教員専用基準の作成</p> <p><input type="checkbox"/>桜花学園大学の分も含む将来計画を踏まえつつ、これからの大学経営上求められている能力や技能を有した教職員の新規採用。</p> <p><input type="checkbox"/>教職員を対象とした国内外研修の活性化</p> <p><input type="checkbox"/>名古屋キャンパス内の他会議体との協働</p> <p><input type="checkbox"/>桜花学園大学との相互履修協定による桜花学科目のキャンパス共通科目化</p> <p><input type="checkbox"/>学園執行部における多様性の実現による運営委員会や各部署における女性役職者の増加を図る。</p> <p><input type="checkbox"/>将来的な人員配置を見据えた各委員会などの統合再編の検討</p>	

### (3) 年度末点検結果

- 名古屋キャンパスにおけるダイバーシティ&インクルージョン実現宣言（仮）の発出は諸般の事情により延期となった。
  - 本委員会の機能強化に向けた施策を検討した（関連規程の改正など）
  - さらに学生募集に向けた魅力的な教育体制を検討し、次年度に一部実施する予定である。
  - 地域貢献としてのリカレント教育体制強化のための広報宣伝を実施した
- ★以下の事項については、人事関連および共通科目化についてのみ実施できたので、その他の項目は次年度の本委員会へ申し送りする。
- 科研バイアウト制度の導入と関連して科研不採択時は学園特別研究費に自動採用するなどのインセンティブ新設
  - 教職員の職位要件の再検討とあわせて採用・昇任時における実務家教員専用基準の作成
  - 桜花学園大学の分も含む将来計画を踏まえつつ、これからの大学経営上求められている能力や技能を有した教職員の新規採用。
  - 教職員を対象とした国内外研修の活性化
  - 名古屋キャンパス内の他会議体との協働
  - 桜花学園大学との相互履修協定による桜花学科目のキャンパス共通科目化
  - 学園執行部における多様性の実現による運営委員会や各部署における女性役職者の増加を図る。
  - 将来的な人員配置を見据えた各委員会などの統合再編の検討

### (4) 次年度以降の行動計画（＝次年度末点検項目／次年度事業計画）

- 本委員会の機能強化および大学評価委員会との役割分担の明確化についての検討をおこなうために、次年度は本委員会と大学評価委員会の構成員を兼任させることにした。
- 本委員会の後任となる大学評価委員会において、桜花学園大学との連合で本キャンパスにおける適切な将来計画構想の実施に向けた検討を開始する。
- 次期認証評価に向けて、学修者本位の内部質保証制度を確立するための検討を開始する。
- 南海トラフ巨大地震の発生に備えて、本キャンパスにおける業務継続計画の策定への検討を始める。

<p>学科名・ 委員会名</p>	<p>IR 推進委員会</p>
<p>(1) 学習成果の評価と改善計画</p> <p><input type="checkbox"/>事務局 IR 室実施の学生アンケート結果について共有し、各学科における強みや課題を認識したうえで、次年度に向けて改善策を検討・実施することにした。</p> <p>評価に用いた指標（資料名）</p> <p><input type="checkbox"/> 学生アンケート</p>	
<p>(2) 今年度の活動内容の評価と改善計画</p> <p><input type="checkbox"/>本委員会の機能強化に向けた施策を検討した（関連規程の改正など）</p> <p><input type="checkbox"/>上記と関連して大学評価委員会との役割分担の明確化について検討をおこなうことにした</p> <p>★以下の事項について検討するよう関連部署に働きかける。</p> <p><input type="checkbox"/>桜花学園大学の分も含む将来計画を踏まえつつ、これからの大学経営上求められている能力や技能を有した教職員の新規採用。</p> <p><input type="checkbox"/>学園中長期計画の達成状況確認</p> <p><input type="checkbox"/>名古屋キャンパス内の他会議体との協働</p> <p><input type="checkbox"/>将来の人員配置に備えた各委員会などの統合再編の検討</p>	
<p>(3) 年度末点検結果</p> <p><input type="checkbox"/>本委員会の機能強化および大学評価委員会との役割分担の明確化についての検討をおこなうために、次年度は本委員会と大学評価委員会の構成員を兼任させることにした。</p> <p><input type="checkbox"/>全学科で教職員対象のアンケートも実施し、円滑な業務実施体制やワークライフバランスの確保を図り、一定の成果を挙げる事ができた。</p> <p><input type="checkbox"/>その他の事項については着手できなかったもので、次年度の本委員会への申し送り事項としたい。</p>	

(4) 次年度以降の行動計画（＝次年度末点検項目／次年度事業計画）

- 本委員会の後任となる大学評価委員会において、桜花学園大学との連合で本キャンパスにおける適切な IR 制度の確立に向けた検討を開始する。
- 事務局における IR 室との適切な連携体制のあり方について検討する。

<b>学科名・ 委員会名</b>	<b>教育・保育職支援センター</b>
<p><b>(1) 学習成果の評価と改善計画</b></p> <p>今年度、各学科で実施され、以下の学生が実習を終えた。</p> <p>保育科</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教育実習Ⅰ 156名 ・教育実習Ⅱ 192名</li> <li>・保育実習ⅠA 156名（2023年度後期） ・保育実習ⅠB 192名</li> <li>・保育実習Ⅱ 190名</li> </ul> <p>英語コミュニケーション</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教育実習（英語）2名</li> </ul> <p>実習に関する事前事後指導、実習中の相談、実習辞退者や実習中止の学生への対応は各学科の実習担当教員及び学科教員が担当している。センターでは、実習前後に実習に関する悩みや相談が学生から寄せられた際に個別相談で対応しながら支援を行った。</p> <p>センター利用者数（面談予約を入れて利用した学生数）は2023年度の就職相談人数は132名であった。昨年度、就職相談を目的にセンターを利用した学生は142名だったが、最終学年の在籍者数における利用率を比較すると、2022年度は31.8%（142/446名）、2023年度は32.3%（132/408名）と昨年度と同程度の利用率であった。センターを利用する学生の傾向として、昨年度に引き続き、複数回相談に来る学生が増加している。これは多くの学生が複数の自治体を受験しているため、1次試験、2次試験、3次試験と試験内容に合わせて、センターの就職相談を利用したことによる。132名中92名は2回以上センターを利用した。複数利用学生が利用学生の7割に及ぶ。平均利用回数としては4.17回だが、実際に一番多く利用した学生は31回である。学生に対する相談機会の公平さを心掛けながら、学生の要望があれば可能な範囲で対応してきた。</p> <p><b>評価に用いた指標（資料名）</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 満足度調査結果</li> <li>■ 2023年度センター報告書「教育・保育職支援センター1年間のまとめ」</li> </ul>	

## (2) 今年度の活動内容の評価と改善計画

### 1、学習支援

保育職経験の豊富な支援員と小学校・特別支援学校の経験を持つ支援員が加わり、必要に応じて学生への様々な支援を行うことができた。今年度は桜花学園大学保育学科1年生のみ2023年12月1日～2024年1月5日の期間に基礎面談を実施した。内容として①進路動機、②委員会やサークルなど人間関係、③実習評価を踏まえた実習中の様子、④現時点で就職をどう考えているかなどを聴き取り、大学生活や実習に関する悩みなどが軽減できるよう学生の思いに寄り添い共に考えるよう面談を行った。小学校・特別支援学校への就職希望者に関して、1年次12月までに小学校免許を取得するか等について意思確認、2年次は教育実習Ⅱの終了後に最終的な進路相談、3年次は学校ボランティアにおいて体験した指導の悩みや不安、次年度実施の採用試験への準備について、4年次は教育実習Ⅳにおける授業づくりの準備や心構え、採用試験への不安などについて希望者に面談を行った。

保育科1年生に対しては11月にセンター利用ガイダンスを実施し、就職活動や実習が本格化する前に、学内で利用できる支援体制を周知した。

### 2、就職支援

保育を希望する学生は、保育内容に関する面接練習、保育実技、集団面接・実技に関する練習と相談を主に行った。毎月の相談記録は学科教員に共有することで、学生の現状及びセンターの取り組みへの理解が深まるように、そして、センターと学科・学生課の支援が連携していけるようにした。学修支援環境整備のため、実習・就職支援に役立つよう面談室の絵本を追加した。「センターまとめ」に詳細を記した、センター支援員の大幅な交代があったが、「自分の保育観を明確にもつ」、「自己認識ができていく」の2点を支援の基本方針として支援員が連携しながら個別支援を実施することができた。

集団面接・集団実技指導は学生またはセンター支援員が自主的に集団作りを行なったが、各学科の学生数減少、進路の多様化が生じている中で、学生の人間関係に基づく呼びかけには限界があった。受験自治体や学生の学部・学科にかかわらず参加者を募って実施するなど、支援体制の継続的検討を行う。

### 3、卒業生支援

通年を通して卒業生からの個別相談を受け付け、今年度も数件の利用があった。4月29日(土)に行われた学生課主催の相談会にはセンター支援員が個別相談対応で参加した。11月12日(日)に行われた「卒業生相談カフェ」には13名(全員 桜花学園大学保育学科卒業)の来場者があった。

### 4、広報活動

これまではセンター通信と掲示板にて行ってきたが、2023年度よりそれらは廃止し、HPを開設して広報を行った。HPが稼働したことにより、卒業生が相談予約や連絡先などの情報をインターネットからも得られるようになった。また、今年度の活動内容をまとめた報告書を作成し、Moodle上にアップロードした。

### 5、関係部署との情報共有

毎月の相談記録を学科教員に共有することで、学生の現状及びセンターの取り組みへの理解が深まるように、そしてセンターと学科・学生課の支援が連携できるようにした。

#### **6、センター報告書の作成**

センターでの取り組みを報告書としてまとめ、学内の教職員に共有した。利用者数などの量的な報告に限らず、支援員が実施する支援の基本方針や、具体的な支援内容など、質的な部分についても言及するとともに、今後の課題も明確に記した。

### **(3) 年度末点検結果**

#### **□学修支援、就職支援、卒業生支援**

学生は学内で様々な相談先を選択し活用しているが、相談件数、センター利用者人数からもセンターの認知度は上がっている。支援員の勤務形態が異なり情報交換や意識統一の難しさもあったが、次に相談を受ける支援員が速やかに対応できるよう相談記録の共有を心がけ、職員の日程があれば面談を一緒に行うなどの工夫で相談の流れを理解し、支援員間の連携・情報共有が出来た。

今年度実施したセンターに関してのアンケートは1項目のみであったため、より詳細にした「センター利用の満足度調査」の実施を検討する。

集団面接・集団実技指導は学生またはセンター支援員が自主的に集団作りを行なったが、各学科の学生数減少、進路の多様化が生じている中で、学生の間人関係に基づく呼びかけには限界があった。受験自治体や学生の学部・学科にかかわらず参加者を募って実施するなど、支援体制の継続的検討を行う。

また、個別相談の予約受付の体制に課題があるため、次年度は、学生にとっての利用のしやすさを重視しながら、効率的な予約システムの構築に向けて利用できるシステムなどの検討を進める。

#### **□関係部署との情報共有**

昨年度に引き続き、今年度も上述した方法でセンターでの支援内容の情報共有を学科教員及び関係部署に発信した。今後の関係部署との情報共有については、学内のコミュニケーションツール等を活用して学生の個別カルテなどをオンライン上にて共有するなど、より良い学生支援のための情報共有のあり方やシステム構築について継続的検討を行う。

#### **□ホームページの運用など広報活動**

学修支援・就職支援の個別相談を実施していく中で、より効果的な支援を実現するために、利用する学生に面談前に準備しておいて欲しいこと、知っておいて欲しいことなどが明確になってきた。例えば、集団面接・集団実技の練習に関すること、自己PRに向けて過去の学生がどのような準備や実践をしたかなどである。それらを、センターを利用し始める前段階にある学生たちにも情報発信していく必要があると考えている。そのため、HPでの広報に加えて、後期の授業期間には、センターからの情報発信ができないか検討する。

(4) 次年度以降の行動計画（＝次年度末点検項目／次年度事業計画）

- ・学修支援（個別相談）
- ・就職支援（個別相談）
- ・卒業生支援（個別相談、5月・11月の相談会）
- ・ホームページやセンター通信の運用など広報活動
- ・関係部署との情報共有のあり方についての検討
- ・センター報告書の作成

学科名・ 委員会名	チャイルドエデュケア研究所
(1) 学習成果の評価と改善計画 該当なし	
(2) 今年度の活動内容の評価と改善計画 <b>□夏季保育セミナーの企画と運営（7月）</b> 卒業生・地域の保育者を迎えてのセミナーを計画した。今年度は大学内の先生と卒業生を講師に迎えて実施した。参加者 78 名。先輩卒業生にもサポートとして参加していただいた（11 名）。経験豊富な卒業生に参加していただいたことが、保育経験が浅い卒業生にとって良い影響になると考える。今年度より体制を変えての実施であったが、実践的な内容だったこともあり好評であった。卒後教育としては、多くの卒業生に参加してもらいたい。 <b>□冬の講演会の企画と運営（11月）</b> （三木裕和先生「障害の重い子どもたちのココロ」） 教育実践が目の前に現れてくるように感じられた。リアルな実践の話は心が揺さぶられ、教育者・保育者としての姿勢や子どもを捉える視点など教育の根幹について考えさせられる機会となった。参加者 89 名。 <b>□年報の発行</b> 今年度も 3 月下旬納品予定。次年度も部数を検討しながら発行を継続予定している。配布先、配布時期についても検討を行った。課題としては、執筆者の応募が少ないことであり、教員だけでなく、支援室や地域からの応募も検討していく必要がある。 <b>□子育て支援室「さくらんぼ」の企画・運営</b> 感染症対策を継続している中、通常の運営に戻りつつある。参加人数こども（729 名）・保護者（631 名）。順調に運営を行うことができた。今年度、交流会は、人数制限を設け 7 組予約制で実施した。相談支援のポスターを掲示したが、個別相談はほぼない。保育士が丁寧に話を聞いてくれる環境となり、保育士と話す中で保護者は自己解決していると考えられる。まさに子育て支援に求められる支援となっていると言える。なお学生の交流会への参加は 25 ゼミ（289 名）。学生のフィールドワークとして、交流会において支援室の親子と交流の機会を持つことができた。それぞれ自分たちで手遊びや絵本の読み聞かせ等、準備し実施することができた。 <b>□産学官連携プロジェクト（さくらんぼフェスタ）</b> 今年度は実施しなかったが、さくらんぼフェスタの実施は、来年度実施予定である（隔年で実施予定）。この場においても学生が様々な子育て団体の方々と協力して、地域の子育て支援に携わる機会となることが期待できる。 <b>□名古屋短期大学附属幼稚園「くまりん」との一元化・一体化に向けて</b> キャンパス内の子育て支援の更なる充実のため、一元化に向けて研究所内及び幼稚園小川園長、くまりん担当の教諭との話し合いを行った。2024 年継続課題とする。	

### (3) 年度末点検結果

#### □夏季保育セミナー（プログラムの再検討）

卒後教育としての夏のセミナーの参加者が年々減少している。要因としては2つ考えられる。一つは、内容である。今年度は、昨年までとは内容を大きく変更した。これまで講師による講演であったが、今年度は、所員が各ブースを展開して参加型のミニ講座を実施した。さらに、卒業生のサポートを依頼したことも経験の浅い卒業生にとっては、良い影響となった。来年度以、この形を継続することで参加者数の推移を見ていく。もう一つには、多くの参加者を集客するためには、所員以外の教員の協力である。卒業生は、教員に会いに来るといっても過言ではない。「今日は、〇〇先生はいないんですか？」という声が多く聞かれた。教員と学生の距離が近いことが本学の良さであるならば、人と人の繋がりを大切にした教育の一環としてこのセミナーが活性化されるためには多くの教員の協力が必要となる。

#### □子育て支援室「さくらんぼ」での学生の教育活動の保障

各ゼミが1回、交流会において支援室の親子と交流の機会を持つことができた。それぞれ自分たちで手遊びや絵本の読み聞かせ等、準備し実施することができた。学内に親子の遊ぶ姿をみたり、子どもと触れ合ったりすることができる支援室の存在は、学生の保育職への期待ややりがい、また、子どもの様子を身近に見ることができることは大きな意味があると言える。

#### □学生のフィールドワークの場の拡大

昨年度の引き続き、市が実施する子育て支援施設である豊明市子育て支援センター「たけのこ」での教育活動を実施した。学生は、市が行う支援について実践的に学ぶことができた。参加は4ゼミ（40名）。今年度は実施できなかったが、さくらんぼフェスタ（地域の子育て団体との共同開催）の実施は、来年度実施予定である（隔年で実施予定）。この場においても学生が地域の方と協力して、地域の子育て支援に携わる機会となるのが期待できる。

#### □子育て研究所における研究部門のさらなる活発化

研究所をベースにした研究実績が年報に留まっている現状である。今後は、実践者に還元できるような課題解決を目指したものを分析していくことが引き続きの課題である。

#### □キャンパス内の子育て支援施設の在り方についての検討

##### 一名古屋短期大学附属幼稚園「くまりん」との一元化・一体化に向けて

令和5年9月より、附属幼稚園内（場所は2号館1階）に子育て支援事業を拡大したことにより、キャンパス内に子育て支援に関する施設が2つになった。このことから、キャンパス内の子育て支援について検討の必要性が浮き彫りとなった。利用者にもわかりやすく利用しやすい事業の運営を考えることが来年度の大きな課題となった。今回の件に伴い、今後は研究所機構図の見直しおよび規程の改正が必要となることが予想されるため、来年度の検討課題とする。

評価に用いた指標（資料名）・2023年度チャイルドエデュケア研究所年報

(4) 次年度以降の行動計画（＝次年度末点検項目／次年度事業計画）

- リカレント教育への取り組み（夏のセミナー・冬の講演会）
- 名古屋短期大学附属幼稚園「くまりん」子育て支援室「さくらんぼ」との一元化・一体化に向けて
- 研究所の機構図等の見直し
- 子育て研究所における研究部門のさらなる活発化

## 4. 基礎データ

短期大学の概要

様式11

(令和6(2024)年5月1日現在)

事項		記入欄															備考					
短期大学の名称		名古屋短期大学																				
学校本部の所在地		愛知県豊明市栄町武侍48																				
教育研究組織	短期大学士課程	学科・専攻課程の名称	開設年月日		所在地										備考							
		保育科	1955年4月1日		愛知県豊明市栄町武侍48																	
		英語コミュニケーション学科	1976年4月1日		愛知県豊明市栄町武侍48																	
	現代教養学科	1982年4月1日		愛知県豊明市栄町武侍48																		
	専攻科	専攻の名称	開設年月日		所在地										備考							
		保育専攻	1991年4月1日		愛知県豊明市栄町武侍48																	
	英語専攻	2007年4月1日		愛知県豊明市栄町武侍48																		
	別科等	別科等の名称	開設年月日		所在地										備考							
		—																				
	学生募集停止中の学科・専攻科等		—																			
教員組織	短期大学士課程(専門職学科を含む)	専任教員等																		備考		
		学科・専攻課程の名称	教授	准教授	講師	助教	計	専任教員	うち				基準数	うち教授数	うち実務家教員数	うち2項該当数	うちみなし専任教員数	助手	非常勤教員		専任教員一人あたりの在籍学生数	
									うち教授数	うち実務家専任教員数	うち2項該当数	うちみなし専任教員数										
		保育科	6人	8人	0人	1人	15人	—	—	—	—	—	9人	3人	—	—	—	1人	37人		20人	教育学・保育学関係
		英語コミュニケーション学科	4人	2人	0人	1人	7人	—	—	—	—	—	4人	2人	—	—	—	0人	14人		8人	文学関係
		現代教養学科	2人	3人	0人	1人	6人	—	—	—	—	—	4人	2人	—	—	—	0人	24人		15人	文学関係
	(短期大学全体の入学定員に応じた教員数)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5人	2人	—	—	—	—	—	—			
	計	12人	13人	0人	3人	28人	0人	0人	0人	0人	0人	22人	9人	0人	0人	0人	1人	75人	16人			
	専攻科	専攻の名称	専任教員等										非常勤教員	専任教員一人あたりの在籍学生数	備考							
			教授	准教授	講師	助教	計	助手														
保育専攻		6人	8人	0人	1人	15人	1人	4人	5人	学科教員が兼務												
英語専攻		4人	2人	0人	1人	7人	0人	0人	0人													
計	10人	10人	0人	2人	22人	1人	4人	3人														

施設・設備等	校地等	区 分	基準面積	専用	共用	共用する他の学校等の専用	計	備考 桜花学園大学と共用 大学基準面積 校地 9,200m <sup>2</sup> 校舎 6,362m <sup>2</sup>	
		校舎敷地面積	—	9,613 m <sup>2</sup>	39,310 m <sup>2</sup>	1,855 m <sup>2</sup>	50,778 m <sup>2</sup>		
		運動場用地	—	0 m <sup>2</sup>	16,710 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	16,710 m <sup>2</sup>		
		校地面積計	8,500 m <sup>2</sup>	9,613 m <sup>2</sup>	56,020 m <sup>2</sup>	1,855 m <sup>2</sup>	67,488 m <sup>2</sup>		
		その他	—	0 m <sup>2</sup>	19,693 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	19,693 m <sup>2</sup>		
	校舎等	区 分	基準面積	専用	共用	共用する他の学校等の専用	計		
		校舎面積計	6,950 m <sup>2</sup>	7,322 m <sup>2</sup>	14,303 m <sup>2</sup>	5,036 m <sup>2</sup>	26,661 m <sup>2</sup>		
		教員研究室	学部・研究科等の名称	室 数					
			保育科	16 室					
			英語コミュニケーション学科	8 室					
			現代教養学科	7 室					
		教室等施設	区 分	講義室	演習室	実験演習室	情報処理学習施設	語学学習施設	
			キャンパス教室等施設	54 室	73 室	4 室	3 室	1 室	
				室	室	室	室	室	
				室	室	室	室	室	
		図書館・図書資料等	図書館等の名称	面積	閲覧座席数				
			名古屋短期大学図書館	2,195 m <sup>2</sup>	320 席				
				m <sup>2</sup>	席				
				m <sup>2</sup>	席				
			図書館等の名称	図書〔うち外国書〕	学術雑誌〔うち外国書〕	電子ジャーナル〔うち国外〕			
名古屋短期大学図書館	239,506 [ 27936 ] 冊		269 [ 33 ] 冊	10 [ 8 ] 種					
	[ ] 冊		[ ] 冊	[ ] 種					
計	239,506 [ 27936 ] 冊	269 [ 33 ] 冊	10 [ 8 ] 種						
体育館	面積								
		2,238 m <sup>2</sup>							
		m <sup>2</sup>							

学生数

様式12

令和6（2024）年5月1日現在

学科・専攻課程名	項目	R2（2020）年度	R3（2021）年度	R4（2022）年度	R5（2023）年度	R6（2024）年度	入学定員に対する平均比率	備考
保育科	志願者数	627	516	313	264	182	85%	
	合格者数	496	445	286	237	173		
	入学者数	250	234	201	158	149		
	入学定員	240	240	240	240	200		
	入学定員充足率	104%	98%	84%	66%	75%		
	在籍学生数	488	490	439	357	304		
	収容定員	480	480	480	480	440		
収容定員充足率	102%	102%	91%	74%	69%			
英語コミュニケーション学科	志願者数	355	166	69	40	53	45%	
	合格者数	269	142	61	36	52		
	入学者数	73	56	26	25	35		
	入学定員	80	80	80	80	50		
	入学定員充足率	91%	70%	33%	31%	70%		
	在籍学生数	152	132	86	51	59		
	収容定員	160	160	160	160	130		
収容定員充足率	95%	83%	54%	43%	45%			
現代教養学科	志願者数	295	181	66	67	61	59%	
	合格者数	231	162	61	63	59		
	入学者数	59	66	30	39	49		
	入学定員	105	105	105	80	50		
	入学定員充足率	56%	63%	29%	49%	98%		
	在籍学生数	138	128	98	58	87		
	収容定員	210	210	210	185	130		
収容定員充足率	66%	61%	47%	37%	67%			
学科（専攻課程）合計	志願者数	1277	863	448	371	296	73%	
	合格者数	996	749	408	336	272		
	入学者数	382	356	257	222	232		
	入学定員	425	425	425	400	300		
	入学定員充足率	90%	84%	60%	56%	77%		
	在籍学生数	778	750	623	476	450		
	収容定員	850	850	850	825	700		
	収容定員充足率	92%	88%	73%	58%	64%		
専攻科	入学定員	27	27	27	27	47		
	入学者数	35	39	31	44	28		
	収容定員	54	54	54	54	74		
	在籍学生数	72	68	66	77	69		

[注]

- 1 学生を募集している学科・専攻課程、専攻科・別科等ごとに行を追加して作成してください。  
ただし、学科・専攻課程等を追加する場合は、直下に追加しないと集計値がずれてしまうので、注意して下さい。
- 2 昼夜開講制をとっている学科・専攻課程等については、昼間主コースと夜間主コースにそれぞれ分けて記入してください。

## 教員以外の職員の概要（人）

令和6（2024）年5月1日現在）

	専任	兼任	計
事務職員	12	2	14
技術職員	0	0	0
図書館・学習資源センター等の専門事務職員	0	0	0
その他の職員	0	0	0
計	12	2	14

[注]

- 1 「その他の職員」とは、守衛、自動車運転手、作業員等の技能労務職員等を指します。
- 2 契約職員、派遣職員等は「兼任」に分類してください。

## 学生データ

## ① 卒業者数（人）

学科・専攻課程	R元(2019)年度	R2(2020)年度	R3(2021)年度	R4(2022)年度	R5(2023)年度
保育科	249	227	245	234	197
英語コミュニケーション学科	84	69	67	55	25
現代教養学科	93	73	55	65	27
専攻科 保育専攻	33	30	23	30	31
英語専攻	0	7	4	0	0

## ② 退学者数(人)

学科・専攻課程	R元(2019)年度	R2(2020)年度	R3(2021)年度	R4(2022)年度	R5(2023)年度
保育科	0	5	6 (除籍者1名を含む)	6 (除籍者1名を含む)	3
英語コミュニケーション学科	9	8	6 (除籍者1名を含む)	5 (除籍者1名を含む)	2
現代教養学科	1	3	4	5	3
専攻科 保育専攻	0	6	6	3	4
英語専攻	0	0	0	0	1

## ③ 休学者数(人)

学科・専攻課程	R元(2019)年度	R2(2020)年度	R3(2021)年度	R4(2022)年度	R5(2023)年度
保育科	5	8	6	3	5
英語コミュニケーション学科	2	6	3	2	1
現代教養学科	3	3	1	0	0
専攻科 保育専攻	0	1	4	3	1
英語専攻	0	0	0	0	0

## ④ 就職者数(人)

学科・専攻課程	R元(2019)年度	R2(2020)年度	R3(2021)年度	R4(2022)年度	R5(2023)年度
保育科	213	182	199	173	162
英語コミュニケーション学科	67	55	40	37	19
現代教養学科	77	61	47	52	24
専攻科 保育専攻	29	29	20	23	28
英語専攻	0	7	4	0	0

## ⑤ 進学者数(人)

学科・専攻課程	R元(2019)年度	R2(2020)年度	R3(2021)年度	R4(2022)年度	R5(2023)年度
保育科	30	37	31	43	26
英語コミュニケーション学科	10	6	10	9	2
現代教養学科	3	3	3	6	0
専攻科 保育専攻	0	0	0	0	0
英語専攻	0	0	0	0	0

## ⑥ 科目等履修生(人)

学科・専攻課程	R元(2019)年度	R2(2020)年度	R3(2021)年度	R4(2022)年度	R5(2023)年度
保育科	2	5	4	3	8
英語コミュニケーション学科	4	1	2	1	2
現代教養学科	4	0	3	3	3
専攻科 保育専攻	0	0	0	0	1
英語専攻	0	0	0	0	0

⑦ 長期履修生(人) 制度なし

学科・専攻課程	H30(2018)年度	R元(2019)年度	R2(2020)年度	R4(2022)年度	R5(2023)年度
保育科					
英語コミュニケーション学科					
現代教養学科					
専攻科 保育専攻					
英語専攻					

## 専任教員の研究活動状況表

(令和元(2019)年度～令和5(2023)年度)

氏名	職位	研究業績				国際的活動 の有無	社会的活動 の有無	備考
		著作数	論文数	学会等 発表数	その他			
太田昌孝	教授	3	3	4	6	有	有	保育科
小川雄二	教授	4	2	0	11	有	有	保育科
近藤茂之	教授	2	1	3	5	有	有	保育科
平野朋枝	教授	2	1	2	11	有	有	保育科
山下直樹	教授	3	0	1	60	無	有	保育科
吉見昌弘	教授	2	4	0	3	無	有	保育科
鬼頭弥生	准教授	4	8	8	3	無	有	保育科
鳶田弘子	准教授	1	4	7	14	無	有	保育科
吉田真弓	准教授	1	7	9	22	有	有	保育科
上原隆司	准教授	1	1	0	0	無	有	保育科
小川絢子	准教授	2	0	0	44	無	有	保育科
高野真悟	准教授	2	2	6	3	無	有	保育科
八幡美保	准教授	0	4	6	1	無	無	保育科
杉山実加	准教授	2	4	0	2	無	有	保育科
小柳雅子	助教	2	5	4	8	無	無	保育科
大塚賢一	教授	0	0	0	1	有	有	英語コミュニケーション学科
福本陽介	教授	1	1	0	1	有	有	英語コミュニケーション学科
三輪恭子	教授	0	2	2	0	有	無	英語コミュニケーション学科
大西美穂	教授	0	6	8	2	無	無	英語コミュニケーション学科
塚本江美	准教授	0	3	4	7	有	有	英語コミュニケーション学科
Stephen J. Clarke	准教授	0	10	6	0	有	無	英語コミュニケーション学科
若松亮太	助教	0	4	4	2	有	有	英語コミュニケーション学科
高谷邦彦	教授	0	3	1	3	無	有	現代教養学科
茶谷淳一	教授	0	1	0	3	無	有	現代教養学科
辻 広志	准教授	1	2	1	2	無	有	現代教養学科
山下玲香	准教授	0	4	1	0	無	有	現代教養学科
小出祥子	准教授	2	5	1	0	無	有	現代教養学科
綾部六郎	助教	1	2	4	0	無	有	現代教養学科

## 外部研究資金の獲得状況一覧表

(令和3(2021)年度～令和5(2023)年度)

	年度	研究種目	研究者名	研究課題
	科学研究費補助金	令和3年度	若手研究	杉山 実加 (研究代表者)
若手研究 (B)			平沼 公子 (研究代表者)	民主主義を物語るということー実践の場としてのアフリカ系アメリカ人文学
基盤研究 (C)			西原 麻里 (研究代表者)	1990年代の少女マンガにおけるジェンダー・異性愛規範に関する表現と解釈の研究
基盤研究 (C)			綾部 六郎 (研究代表者)	ポスト・ジェンダー法学の構築に向けた総合的研究：法と意味秩序の相克を軸に
基盤研究 (C)			大西 美穂 (研究分担者)	エキスパートナースの認知行動のフレーム意味論的解析の看護支援システムへの統合
基盤研究 (C)			吉田 真弓 (研究分担者)	韓国国家水準幼児教育課程の改定・実行過程に関する調査研究
基盤研究 (C)			西原 麻里 (研究分担者)	マンガー舞台芸術間のアダプテーション分析とその理論化
令和4年度		若手研究	杉山 実加 (研究代表者)	明治期以降に「逸脱した母」と大衆がみなしてきた乳幼児の母親像の変遷
		基盤研究 (C)	綾部 六郎 (研究代表者)	ポスト・ジェンダー法学の構築に向けた総合的研究：法と意味秩序の相克を軸に
		基盤研究 (C)	西原 麻里 (研究代表者)	1990年代の少女マンガにおけるジェンダー・異性愛規範に関する表現と解釈の研究
		研究活動スタート支援	巖田 弘子 (研究代表者)	保育所実習におけるミドルリーダーとしての主任保育士の指導行動モデルの提案
		基盤研究 (C)	大西 美穂 (研究分担者)	エキスパートナースの認知行動のフレーム意味論的解析の看護支援システムへの統合
		基盤研究 (C)	吉田 真弓 (研究分担者)	韓国国家水準幼児教育課程の改定・実行過程に関する調査研究
		基盤研究 (C)	平野 朋枝 (研究分担者)	幼児期の運動能力と調整力の発達に関する研究
令和5年度	研究活動スタート支援	高野 真悟 (研究代表者)	病院の小児外来における造形活動による療育環境改善に関する研究	
	基盤研究 (C)	綾部 六郎 (研究代表者)	ポスト・ジェンダー法学の構築に向けた総合的研究：法と意味秩序の相克を軸に	
	基盤研究 (C)	高須 裕美 (研究代表者)	保育者の音楽理解と表現力を育成する指導法開発	
	研究活動スタート支援	巖田 弘子 (研究代表者)	保育所実習におけるミドルリーダーとしての主任保育士の指導行動モデルの提案	
	基盤研究 (C)	大西 美穂 (研究分担者)	日英の語りテキスト (原文/訳文) 比較的考察	
	基盤研究 (C)	吉田 真弓 (研究分担者)	韓国国家水準幼児教育課程の改定・実行過程に関する調査研究	
	基盤研究 (C)	平野 朋枝 (研究分担者)	幼児期の運動能力と調整力の発達に関する研究	
	基盤研究 (C)	大塚 賢一 (研究分担者)	第二言語におけるワーキングメモリ効果を改善するトレーニング	

その他の外部研究資金	年度	調達先・資金名等	研究者名	研究課題
	令和3年度			
	令和4年度			
	令和5年度			

[注]

科学研究費補助金の「研究種目」は「基盤研究 (A・B・C)」、「若手研究 (A・B)」等を記載してください。

## 理事会の開催状況（令和3（2021）年度～令和5（2023）年度）

（人）

開催日現在の状況		開催年月日 開催時間	出席者数等			監事の 出席状況
定員	現員（a）		出席理事数 （b）	実出席率 （b/a）	意思表示 出席者数	
9	9	令和3年5月24日 10：00～12：10	8	88.9%		2/2
	9	令和3年7月20日 15：10～16：10	7	77.8%	1	2/2
	9	令和3年11月26日 14：30～16：00	8	88.9%		2/2
	9	令和4年2月24日 15：20～16：40	8	88.9%		2/2
	9	令和4年3月23日 13：00～16：00	7	77.8%		2/2
9	9	令和4年5月26日 10：00～12：10	7	77.8%		2/2
	9	令和4年5月26日 15：10～15：50	7	77.8%		2/2
	9	令和4年7月28日 11：10～12：10	6	66.7%		2/2
	9	令和4年11月24日 13：00～14：00	8	88.9%		2/2
	9	令和5年1月23日 11：00～11：50	7	77.8%		2/2
	9	令和5年2月24日 13：00～14：10	8	88.9%		2/2
	9	令和5年3月29日 15：00～17：00	8	88.9%		2/2
9	9	令和5年5月26日 10：00～12：10	7	77.8%		2/2
	9	令和5年7月27日 14：00～15：00	8	88.9%		2/2
	9	令和5年12月7日 14：00～14：45	7	77.8%	2	2/2
	9	令和6年2月19日 15：00～16：00	7	77.8%	2	2/2
	9	令和6年3月27日 15：00～17：00	7	77.8%	1	2/2

※関係法令：私立学校法 第36条、同第37条、同第38条

## 評議員会の開催状況（令和3（2021）年度～令和5（2023）年度）

（人）

開催日現在の状況		開催年月日 開催時間	出席者数等			監事の 出席状況
定員	現員（a）		出席評議員数 （b）	実出席率 （b/a）	意思表示 出席者数	
19～25	20	令和3年5月24日 13：00～14：50	18	90.0%		2/2
	19	令和3年7月20日 14：00～15：00	16	84.2%	3	2/2
	19	令和3年11月26日 13：00～14：10	15	78.9%	3	2/2
	19	令和4年2月24日 14：00～15：10	15	78.9%	4	2/2
	19	令和4年3月23日 10：00～12：20	15	78.9%	1	2/2
19～25	19	令和4年5月26日 13：00～15：00	14	73.7%	2	2/2
	19	令和4年7月28日 10：00～11：00	12	63.2%	2	2/2
	19	令和4年11月24日 10：30～11：30	15	78.9%		2/2
	19	令和5年1月23日 10：00～10：40	16	84.2%		2/2
	19	令和5年2月24日 10：30～11：10	15	78.9%		2/2
	19	令和5年3月29日 13：00～14：40	13	68.4%		2/2
19～25	20	令和5年5月26日 13：00～15：00	15	75.0%		2/2
	20	令和5年7月27日 13：00～13：50	16	80.0%		2/2
	20	令和5年12月7日 13：00～13：45	17	85.0%	2	2/2
	20	令和6年2月19日 14：00～15：00	17	85.0%	1	2/2
	20	令和6年3月27日 13：00～14：50	14	70.0%	4	2/2

※関係法令：私立学校法 第41条、同第42条、同第43条、同第44条

## 短期大学の情報の公表

令和6（2024）年5月1日現在

## ① 教育情報の公表について

No.	事項	公表方法等
1	大学の教育研究上の目的に関する事	ウェブサイト <a href="https://www.nagoyacollege.ac.jp/image/syllabus/2022/202201.pdf">https://www.nagoyacollege.ac.jp/image/syllabus/2022/202201.pdf</a>
2	卒業認定・学位授与の方針	ウェブサイト <a href="https://www.nagoyacollege.ac.jp/outline/three_policy/">https://www.nagoyacollege.ac.jp/outline/three_policy/</a>
3	教育課程編成・実施の方針	ウェブサイト <a href="https://www.nagoyacollege.ac.jp/outline/three_policy/">https://www.nagoyacollege.ac.jp/outline/three_policy/</a>
4	入学者受入れの方針	ウェブサイト <a href="https://www.nagoyacollege.ac.jp/outline/three_policy/">https://www.nagoyacollege.ac.jp/outline/three_policy/</a>
5	教育研究上の基本組織に関する事	ウェブサイト <a href="https://www.ohka.ac.jp/outline/soshiki.html">https://www.ohka.ac.jp/outline/soshiki.html</a>
6	教員組織、教員の数並びに各教員が有する学位及び業績に関する事	ウェブサイト <a href="https://www.nagoyacollege.ac.jp/outline/information/organization/kyouin.html">https://www.nagoyacollege.ac.jp/outline/information/organization/kyouin.html</a>
7	入学者の数、収容定員及び在学する学生の数、卒業又は修了した者の数並びに進学者数及び就職者数その他進学及び就職等の状況に関する事	ウェブサイト <a href="https://www.nagoyacollege.ac.jp/outline/information/situation/index.html#situation01">https://www.nagoyacollege.ac.jp/outline/information/situation/index.html#situation01</a>
8	授業科目、授業の方法及び内容並びに年間の授業の計画に関する事	ウェブサイト <a href="https://www.nagoyacollege.ac.jp/outline/information/course_guide/">https://www.nagoyacollege.ac.jp/outline/information/course_guide/</a>
9	学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準に関する事	ウェブサイト <a href="https://www.nagoyacollege.ac.jp/outline/information/course_guide/">https://www.nagoyacollege.ac.jp/outline/information/course_guide/</a>
10	校地、校舎等の施設及び設備その他の学生の教育研究環境に関する事	ウェブサイト <a href="https://www.nagoyacollege.ac.jp/campuslife/campusmap/">https://www.nagoyacollege.ac.jp/campuslife/campusmap/</a>
11	授業料、入学料その他の大学が徴収する費用に関する事	ウェブサイト <a href="https://www.nagoyacollege.ac.jp/image/campuslife/tuition_scholarships/gakusei05.pdf">https://www.nagoyacollege.ac.jp/image/campuslife/tuition_scholarships/gakusei05.pdf</a>
12	大学が行う学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援に関する事	ウェブサイト <a href="https://www.nagoyacollege.ac.jp/campuslife/">https://www.nagoyacollege.ac.jp/campuslife/</a>

※関係法令：学校教育法 第113条、学校教育法施行規則 第172条の2

## ② 学校法人の情報の公表・公開について

	事項	公表・公開方法等
	寄附行為、監査報告書、財産目録、貸借対照表、収支計算書、事業報告書、役員名簿、役員に対する報酬等の支給の基準	ウェブサイト <a href="https://www.ohka.ac.jp/outline/report.html">https://www.ohka.ac.jp/outline/report.html</a>

※関係法令：学校教育法施行規則 第172条の2、私立学校法 第33条の2、同第33条の3、同第63条の2